

古史傳

自第四十段
至第四十七段

九

歷^和第三号

			和	書	門
		四二五	一三八		
	一三一	一八			
	一				
五〇					
冊	架	函	號	類	

庫文閣内			
四〇	四二五		和
函	一八		書
一	〇		
六	冊	號	類
架			

内閣文庫	
番號	和 42518
冊數	40 (12)
函號	140 185



古史傳記

神代卷之三

天皇御紀

男 武甕槌

女 瓊杵

於是天照大神詔神速須佐

土男命曰於葦原中國聞有

氣母智神云者立爾就候詔



十四

古史傳九出卷

神代中一出卷

平篤胤謹撰

男 鐵胤
孫 延胤

續攷

於是天照大御神詔神速須佐

出男命曰於葦原中囿聞有宇

氣母智神云者宜爾就候詔矣

○古史傳九

○一

カレハヤスサノヲノ三コトオホ三コトカレコミテアマクダリ
故速須佐出男命受勅而天降
マシテイタリウケモ千ノカミノ三モトニテヲシ
坐而到宇氣母智神出許而食
モノヲコヒタマヒソノウケモ千ノカミニキコノウ
物乞給其宇氣母智神矣爾宇
ケモ千ノカミノヨリハナクチマタレリイデクサ
氣母智神自鼻口及尻取出種
グサノタメツモノヲテニモトリノツクモクサグサ
種出味物而於百取出机種種

ツクリソナヘテ三アヘタテマツルトキニハヤスサノヲノ
作具而奉饗出時速須佐出男
三コトタチウカビソノレワザラテオモホシタテマツルトキタナキモノテ
命立伺其態而爲奉進穢物而
イカリオモホテリテノリタマハクケガラハレキカモイヤレキカモナゾモモテ
忿然作色詔曰穢哉鄙哉寧以
キタナキモノヲヤシナフアレニゾトノリタマヒテスナハチヌキテタチヲウチコロシ
穢物養吾乎詔而迺拔劔擊殺
ソノウケモ千ノカミヲテカヘリゴトマラレテツバラニマラス
其宇氣母智神而復命而具言

ソノコトヲトキニアマテラスオホ三カ三イタクミイカリニシ
其事出時天照大御神甚怒坐

而汝者惡神也。不須相見詔而。

乃一日一夜隔離而住矣。

葦原中囿ハ天上小て。此囿の事を云時ふいふ言あ也。委

く在下第百六段云を見るはし。○宇氣母智神を豐宇氣毘

賣神の亦名ふして食物此神小坐あと上第十三段ふ云るが

如し。ちて此神をその生坐る時と也。此不ぞまで。此囿小

住居ませ依を其地は何所ありぬ。攝津國風土記云。稻

賣神居山中以盛飯因以為名といひま昔豊宇可乃賣

神常居稻掠山而為膳厨之處あどあるを由あるうま

山城名勝志よ桂里の故事を記して或云月詠等受天照

大神勅降于豊葦原中囿到于保食神許時有一湯津桂樹

月詠等乃倚其樹立之其樹所今号桂里と云り此說風

土記の傳ふやと思はるまれもし実あらむ山城國

郡あり○宜爾就候大御神のちう也無げふかく詔ひ出

給子依事を幽き所由あるまとれるはし。○受勅而を於

保美許登加斯古美氏と訓む。万葉あどふ多き詞あ也。○

鼻和名抄小鼻和名波奈。○尻同書ふ。尻和名之利とあり。

如此く訓べし。師云。尻を古書み。凡て加久胤と訓るを之

を漏してたまはれ。あど有し例あり。信ふはる時こそ。然あるべけれ。本ふさ其訓を付むこと。いなり。之理てふ言も。古をたか。よまと言き。尻字。久米繩。あど。其餘。みあ之理と云。用ひ多れ。バ。異さまの訓。れ。ら。げ。う。味物。師云。多米都母能と訓べし。應神卷。此末。あるも。如此。其故。貞觀儀式。大嘗祭。儀。辨大夫。入。自儀。主基。兩。少。有。了。其詞。御酒。倉代。缶物。多米都物。雜。菓子。飯。圀。を。云。云。有。了。其詞。御酒。倉代。缶物。多米都物。雜。菓子。飯。あど。此色。目見え。ま。と。大多米津酒。大多米酒。波。多米。御酒。多。每。米。大。多。米。院。あ。と。見え。延喜式。ふ。も。多。明。米。多。明。酒。多。明。酒。屋。多。明。料。理。屋。れ。ど。見。え。ぬ。れ。ど。凡。て。上。代。の。事。也。物。名。も。何。も。神。のみ。多。く。出。て。他。の。一。も。見。え。ぬ。れ。ど。凡。て。上。代。の。事。也。物。名。も。何。も。神。物。の。限。れ。る。名。目。と。め。聞。ゆ。れ。ど。さ。ふ。非。交。古。凡。て。

美味飲食を云る名。凡て上代の事也。物名も何も神も。多。る。大。嘗。祭。の。み。多。く。出。て。他。の。一。も。見。え。ぬ。れ。ど。凡。て。上。代。の。事。也。物。名。も。何。も。神。物。の。限。れ。る。名。目。と。め。聞。ゆ。れ。ど。さ。ふ。非。交。古。凡。て。奉。大。炊。寮。御。飯。香。美。特。賜。嘉。名。と。あ。る。を。以。て。知。は。し。奉。大。炊。寮。御。飯。香。美。特。賜。嘉。名。と。あ。る。を。以。て。知。は。し。限。ら。ざ。る。お。と。此。り。て。明。ぎ。し。第。百。四。種。は。上。あ。る。は。取。出。お。る。物。の。品。下。れ。る。は。其。を。御。饌。物。小。作。ゆ。調。と。依。品。の。多。丸。を。云。已。陰。陽。寮。式。雜。祭。文。海。○。作。具。を。師。云。都。久。理。會。那。閉。と。訓。べ。し。内。宮。儀。式。種。味。物。儲。備。仕。奉。祈。年。祭。祝。詞。種。色。物。乎。備。奉。氏。あ。と。見。也。會。那。布。と。は。不。足。ま。ぞ。れ。く。齋。牙。る。を。云。俗。言。神。物。供。る。を。會。那。布。○。立。

伺とはカヒタテ隠立カクレタテて物の隙ヒマおどとヒ窺ウカひ觀ミ多ニるルふフ也ヤ。○擊ウチ殺コロハ。擊ウチて殺コロし給たまふとふは非ウチ交ケ。擊ウチハ加カろく添ソとる辭コトふて。實マコトを斬キリ殺コロし給たまふ也ヤ。拔ヒキ劍ケンとト有アるル。扱カ如カ此コノ荒ウラぶル也ヤ。御所ミヤド爲サの有アしは。其ソノ荒ウラ御魂ミタマと坐イひ禍津日神ミタマの屬ツキ坐イまはひに依よても也ヤ。其ソノ下シふル。帥シ其ソノ子コ五十イハ猛マウ神カミ而シテ降ク坐イとト有アるルを思オモふ也ヤ。其ソノ上ウ坐イるル時トキの状シマ也ヤ。此コノもモさハ依よ状シマ見ミえぬ也ヤ。御身ミミを合アせて坐イませるル也ヤ。其ソノ由ユを上ウみま云イふル如カく禍津日神ミタマハ。伊邪那岐イセナギ大神オホカミの穢ケガレをシ死シ事コトを惡アクみ給たまふ御靈ミタマも依よて生ナ坐イるル神カミも坐イひに故ユふル。いまぬく汚穢キタナキ也ヤとを惡アク給たまふを。宇氣ウキ母智神モチノカミの口クチまと尻シおどとヒ出デしとるル物モノを。奉進オウジンらまくも。依よて。其ソノを怒イて坐イひ御心ミココロのみミまくみ。それやぐて。宇氣ウキ

母智神モチノカミ此コノ神德カミタマありとを所思オモヒ看ミさげて。其ソノ御心ミココロの進シむまふく。擊殺ウチコロし給たまへるル也ヤ。此コノぞ荒御魂ウラミタマのウ然シカれども。此神カミを殺コロし給たまふら種タネく。穀物も。此成ナ出デらる也ヤ。即ツ荒御魂ウラミタマの徳用トクヨウも有アるル也ヤ。○甚怒イタダク坐イ而シテ畏オソれれど。大御神オホミカミ此コノ時トキ加カく甚イく怒イて坐イるル。大御心オホミココロのウを窺ウカひ。奉るル也ヤ。初ハジメ免須佐之男ニギハヤヒ命ノミコトも勅ツケして。宇氣母智神ウキモチノカミ字候ナリせ給たまふ。彼神カミの宇氣ウキの神德カミタマ此コノ大死オホシも坐イまはひと残ノコのウ也ヤ。聞ク看ミし坐イまはひ。依故ユも。ゆらしく。所思オモし。坐て。其也ヤ。聞ク有アるル。宇氣ウキ母智神モチノカミ云イ者モノと詔ミコトノコトへるル。其ソノ功德トクデのウをいふ。あらむ候コトて來給きたたまふと此御心コノミココロも。も此コノ給たまへるル也ヤ。あらむ。むを果ハし

て大御神此所聞看しおき給子如く神徳の坐くける
ふ須佐之男命の撃殺多るへるをし。白多るふよ依てぞ。
彼懇み惜み所思看は御心を正かくて御怒正坐るれ依
ばし。信ふうべある大御怒うぞ有る○一日一夜隔離而住矣此文ま
於論ふばきまといゆ。抑天上を彼清明うる物の萌上り
て成まは御国あまを元と正常書あるべき上り。大御神
此御光の照徹正坐せれを夜を有るはくも所思さぬふ。
此よかく有るを心得交もしくは天上よも本をゆ晝夜
此有て大御神の御光も。国土よ晝夜の有る如く。休り給
ふ時も有ふや。天学よ委き或人此説よ照日の日くふ異
あく照るとを見ゆれど常ふ心を於けて

同へて雲を蔽わざれど自然よ照のおよあく劣りて因
る事ありと云り。ゆまを此故ふを非じとぞ思ふ。けりて因
土此晝夜をれまをハ。轉旋て天日ふ對ふと反くとの
故うはゆまを。其在天ふ晝夜の有る因よ依て。因土もそ
まよ從ひて。晝夜の定正を出來るれ依ふや。と思ひしうと。
あ不熟思牙也。此を此時此御怒の太かゆしを云牙也
も。其はあむ一日一夜むく正此間を。御面を合せ給を交。
離て住正しまて此事ふてやぐて御怒の休み給子正し
との事を。此因土の晝夜よ準へる語傳とる文ふぞ有る
依。其在下ふた猶甚しき御荒びの有るをさすよ見直し
聞直し給ふ廣き厚支御惠此趣を見て。想像り奉へ志。
然まバ六此一日一夜を。天ふ晝夜の有る此謂ふハ非交

凡此書紀子取とまへる本書ヲ其趣のよく聞えとて
文を改むとてかく紛
らハしく成ふ也

故是後天照大御神復遣天熊

出大人而看出時宇氣母智神

實已死矣故其所殺出神身生

物者於顙上生粟於眉上生蠶

與桑木於目生稗於腹生稻種

於衾生麥及大豆小豆頂化爲

牛馬矣故天熊出大人悉取持

而奉獻出時天照大御神喜出

詔曰是物者宇都志枳青人草

出。食而可活物也。詔而乃以粟

稗麥豆爲陸田種子。以稻爲水

田種子。又定天邑君。卽以其稻

種。始而令殖天狹田。及長田。則

其秋垂穎。八握莫莫然。甚快實

矣。又於天香山。殖桑木。而養蠶。

其蠶含口。而抽絲。養蠶。絁織出

業。自此時始有矣。

天熊之大人。此神名他書小所見。とる。と。或人。武三
と。一。神。あらむ。と言。分。れ。ど。然。も。を。非。じ。熊。之。大。人
此。を。名。の。似。と。る。よ。依。て。の。説。を。る。べ。し。加。依。時。の。御。使
あ。ど。を。勤。む。る。天。上。此。卑。死。神。を。誨。ふ。也。第。百。九。段。天。稚。日
と。其。次。段。疾。風。神。の。○。看。之。時。去。を。宇。氣。母。智。神。に。殺。さ。え
事。あ。ど。由。有。げ。あ。り。

給へ依を甚く惜みあるふ餘りふ。須佐之男命此殺し給
 する由は白し給へども。もし生居イキキとるふ事の何らむらと。
 猶ナホもくしく所思看ての御使あす。宇氣母智神實已死矣。
 と何る小心を扱ける。此大御心を想像オモヒす奉るはし。○牛
 馬。馬を扶桑略記昌泰四年七月二日。左馬寮乾角坐ス從五
 位下生馬神被加一階勝志も。延喜元年七月一日加
 左馬寮坐生馬神位一級。依御馬苦動甚也ま。○諸社根元
 月十五日從五位下坐右馬寮保馬神。位階を加へ給する由も見也。○願を類聚名義抄小
 ヒタヒ也見也和名抄。ハ加之良乃加波良と有れど。○
 眉和名抄。説文云。眉和名。目上毛也と何也。○蠶和名抄
萬由

小。説文蠶虫吐絲者也和名。繭蠶衣也和名。と見也ま。和
古とも有れど。蚕を唯み。古と云ぞ。本言ある加比古ハ養蚕の意あり。○桑和名抄和名。久波蠶
 所食也と何也。○稻種穀物五品の中み。此のみ種と云へ
 るはいろふと云ふ。師の言れある如く。此ふ生れるは。六
 品おのら其實あり。然るも餘の五品を種と云。祢ど自オ扱
 から實のおと依依を。稻を伊禰イネと此み云ては。穂ホみ在時
 此名ふして。實を聞えび。莖キおがら生オある如く聞えて。
 紛マらはしきればあり此も以ても古言のあぢざり。○粟。
 稗。麥。大豆。小豆。和名抄。粟和名阿波。稗新撰字鏡。比江
 と見え。麥和名牟岐。大豆和名萬米。小豆和名阿加安豆木。

師云、ハハ阿豆伎あるを、黄小豆、緑小豆、ハハど云、漢名ある不就て、後、色を分、云ふ名あり。○右十品の中、八品をみ、其、所、く、生、ま、依、を、牛、馬、の、二、品、を、直、ハハよ、そ、此、頂、の、化、れ、ゆ、と、有、ハハと、所、由、ハハ有、ハハる、ハハは、ハハし。ハハ師云、是、等、を、ハハも、不、如、此、身、軀、ハハ生、ハハぞ、云、ハハを、ハハ仮、の、言、ハハふ、ハハして、ハハ実、ハハを、ハハ其、物、ハハく、ハハ宜、ハハき、ハハ土、ハハ地、ハハ殖、ハハを、ハハ去、ハハと、ハハ説、ハハを、ハハせ、ハハる、ハハを、ハハみ、ハハれ、ハハ例、ハハ此、ハハあ、ハハま、ハハさ、ハハの、ハハし、ハハ死、ハハ推、ハハ量、ハハの、ハハ私、ハハ事、ハハふ、ハハて、ハハい、ハハゑ、ハハく、ハハ古、ハハ傳、ハハの、ハハ意、ハハを、ハハそ、ハハむ、ハハけ、ハハて、ハハま、ハハと、ハハ生、ハハる、ハハ物、ハハと、ハハ其、ハハ処、ハハと、ハハを、ハハ合、ハハせ、ハハて、ハハ然、ハハる、ハハ由、ハハを、ハハ云、ハハる、ハハも、ハハ眉、ハハ不、ハハ蚕、ハハの、ハハ生、ハハる、ハハを、ハハ云、ハハる、ハハ外、ハハを、ハハ皆、ハハあ、ハハと、ハハら、ハハび、ハハ強、ハハ言、ハハあ、ハハり、ハハ凡、ハハて、ハハ何、ハハ○ハハ是、ハハ物、ハハ者、ハハご、ハハと、ハハも、ハハ強、ハハて、ハハい、ハハふ、ハハバ、ハハ如、ハハ何、ハハさ、ハハま、ハハふ、ハハも、ハハ云、ハハる、ハハ物、ハハぞ、ハハ宇、ハハ都、ハハ志、ハハ枳、ハハ青、ハハ人、ハハ草、ハハ之、ハハ食、ハハ而、ハハ可、ハハ活、ハハ物、ハハ也、ハハ詔、ハハ而、ハハ去、ハハの、ハハ大、ハハ詔、ハハ詞、ハハを、ハハ熟、ハハ思、ハハひ、ハハて、ハハ大、ハハ御、ハハ神、ハハの、ハハ人、ハハ草、ハハを、ハハ愛、ハハく、ハハ所、ハハ思、ハハ看、ハハは、ハハ大、ハハ御、ハハ心、ハハ此、ハハ不、ハハど、ハハ多、ハハ伺、ハハ奉、ハハる、ハハべ、ハハし、ハハ此、ハハ上、ハハ第二十九段、ハハ御、ハハ頸、ハハ珠、ハハを、ハハ賜、ハハふ、ハハ處、ハハ云、ハハる、ハハ如、ハハく、ハハや、ハハぐ、ハハて、ハハ伊、ハハ邪、ハハ那、ハハ岐、ハハ大、ハハ神、ハハの、ハハ青、ハハ人、ハハ草、ハハを、ハハ愛、ハハみ、ハハま、ハハ去、ハハ御、ハハ心、ハハを、ハハ大、ハハ御、ハハ心、ハハと、ハハ爲、ハハ給、

ふ、よ、て、言、ハハ以、ハハて、ハハ也、ハハを、ハハむ、ハハ二、ハハ柱、ハハ産、ハハ靈、ハハ大、ハハ神、ハハの、ハハ此、ハハ国、ハハを、ハハ修、ハハ固、ハハ成、ハハせ、ハハと、ハハ依、ハハ給、ハハへ、ハハる、ハハ大、ハハ詔、ハハ命、ハハ不、ハハ本、ハハお、ハハく、ハハ事、ハハ不、ハハお、ハハむ、ハハ有、ハハる、ハハ御、ハハ紀、ハハ宣、ハハ化、ハハ天、ハハ皇、ハハ元、ハハ年、ハハ五、ハハ月、ハハの、ハハ詔、ハハ曰、ハハ食、ハハ者、ハハ天、ハハ下、ハハ之、ハハ本、ハハ也、ハハ黄、ハハ金、ハハ萬、ハハ貫、ハハ不、ハハ可、ハハ療、ハハ飢、ハハ白、ハハ玉、ハハ千、ハハ箱、ハハ何、ハハ能、ハハ救、ハハ冷、ハハ云、ハハく、ハハ安、ハハ国、ハハ之、ハハ方、ハハ更、ハハ無、ハハ過、ハハ此、ハハと、ハハ何、ハハ也、ハハお、ハハれ、ハハを、ハハと、ハハ有、ハハ難、ハハき、ハハ勅、ハハ語、ハハお、ハハり、ハハし、ハハ熟、ハハ思、ハハふ、ハハべ、ハハし、ハハ○ハハ陸、ハハ田、ハハ種、ハハ子、ハハを、ハハ波、ハハ多、ハハ都、ハハ母、ハハ能、ハハと、ハハ訓、ハハは、ハハし、ハハ○ハハ水、ハハ田、ハハ種、ハハ子、ハハハ、ハハ多、ハハ那、ハハ都、ハハ母、ハハ能、ハハと、ハハ訓、ハハべ、ハハし、ハハ○ハハ右、ハハ種、ハハく、ハハの、ハハ穀、ハハ此、ハハ中、ハハ不、ハハ稻、ハハを、ハハ田、ハハお、ハハも、ハハの、ハハと、ハハ定、ハハ給、ハハ予、ハハる、ハハお、ハハせ、ハハは、ハハ此、ハハ種、ハハ此、ハハ腹、ハハ不、ハハ生、ハハま、ハハ依、ハハを、ハハ思、ハハふ、ハハ主、ハハと、ハハあ、ハハる、ハハ物、ハハお、ハハ依、ハハ所、ハハ由、ハハお、ハハる、ハハは、ハハし、ハハ○ハハ天、ハハ邑、ハハ君、ハハ天、ハハ上、ハハあ、ハハる、ハハ邑、ハハ君、ハハお、ハハて、ハハ此、ハハを、ハハ田、ハハ畠、ハハを、ハハ作、ハハる、ハハ長、ハハを、ハハ云、ハハあ、ハハる、ハハべ、ハハし、ハハ○ハハ天、ハハ狭、ハハ田、ハハ長、ハハ田、ハハ此、ハハを、ハハ天、ハハ上、ハハ不、ハハ在、ハハる、ハハ大、ハハ御、ハハ神、ハハの、

御營田ミツクダの名あり。狹を長と對カひて。字の意此言あらむと
所思れど然らば。此は眞マコトに通ふ佐サふて。稱言タテマツルあり。餘ノチも此
書紀フキキ大御神の御田ミタ。天垣田アメノカケ。天安田天安。○莫ナシ然シカ師シ比斯ヒシ
天アメノ平田ヒラタ。天アメノ邑并田ヒノナリ。天アメノ名見ナミミえとり。○莫ナシ然シカ師シ比斯ヒシ
那比斯牙理ナヒシヤリ氏ウヂと訓ナツれ。依ヨり依ヨり有アべし。○甚快實シカクシカク矣ナリは。
本ホ尔ニ甚快也シカクシカクナリ也ナリ。師シの伊登イト余ヨ久ク美能理ミノリ伎キと訓ナツま。
依ヨり依ヨり文フミを成ナツし。於コ。さて此時コトノトキをり始ハジて。田タ殖シクの事コトハ起ハ
るを思オモふ。○天香山アメノカケヤマは。火之迦具土ヒノカガヤ神カミの御體ミタマ此コノ成ナツまる山ヤマあ
る故ユ。かく名ナ小負オホるナリと上ウヘ。第ダイ十ジュウ段ダン。小云コト。云イハす。けて此山コノヤマ小桑コノクサ
木キを殖シクて蠶カを養カヒと依ヨり。深コき由ユ何ナニるナリとあるナリ。試シを
言コトは。此虫コノムシのいとナもナくナ。奇ク異イき蟲ムシあるナリことコトをコト。今イマ更マ云イハす
までもナあリ。そが中ナカに。穢ケガレを惡クむことコトのナ。去クぐれてナ奇クうル

小就コトて按オみ下シの岩屋戸イハヤド。段ダン小種コトの物モノをミみ香山カクヤマより
取トれることコトをコト。穢ケガレを清スむル由ユあるナリべきことコト。彼カノ処トコロに云ふ
養カヒ立タとまはむとナ。御量ミタマふぞ有アりナらし。○其ソノ蠶ムシ含ミ口クチ而シテ
抽ヒキ絲イトハ。蠶ムシ和名ニハ萬由マンユとナり。けて此コノをコト口クチ小含オホみてヒキ絲イトをヒキ
げルは。今イマもナ爲スるコト事コトあリやナ問タぬベシ。○維織ヒタオリ之ノ業ソノ自リ此コノ時トキ
始ハジ有アりナ。其ソノ維織ヒタオリ此コノ事コトをコト始ハジめるナリは。上ウヘあるナリ。天萬アメノマン栲幡クハタ千幡チハタ
比賣ヒメ命ノミあるナリべきとナ言イハすナ。其ソノ下シタ小次オホくナ言イハすナ
をミ見ミてシ辨シべし。或シ人ヒト問タ。是時コノトキをコト田タ殖シクの事コト。まナ維織ヒタオリの事コト
時トキ始ハジて。食物シヨクモノ之道ノチ始ハジまりとナ云イハすナ。心得ココロエぐベシ。依ヨりハ此コノ
命ノミの御衣ミカド服フクの事コト。又マタ大御神オホミカミ此コノ御裝ミカド束スの事コト。あリともナ見ミえト
れバ是コトをコト早ハヤくナ。天地アメノチ初發ハジマリの時トキをコト。誰タレもナ然シカくナ思オモふナことコト。あリどもナ
いままナ古コノ意イを得エるナリものモノをコト。然シカくナはシ世ヨの初發ハジマリの神カミとナ

何も世も異ある神徳の坐ませば食物を看たりや看さ
 びやいのふ有けむ知べうらまよと衣服のみあらば凡
 ての調度も皆其御量お成具るして闕ることれく其を
 何を以ていふ際お非た其を此上お化立八尋殿と何依
 て量知べき際お非た其を此上お化立八尋殿と何依
 云る事をも思ふべし侍て此大御神の始給へる事ど
 もハ此とり以後の衣食此道の起原おてそは須佐之男
 命の宇氣母智神を殺し給へるより事起れるを元とり
 如、此、あるべき幽き由此備れ依事おるべくそれとは産
 靈神の神靈に因ることおるを初免給する神の御上お准
 れる後世此狭き漢意此うおまる世人の習ふりハ大御
 へ思ふぞ種々見行して此物等お顯見青人草の食て
 神の右此種々見行して此物等お顯見青人草の食て
 活べき物ぞと詔へる大詔命の意を熟思ひて此幽く
 妙ある理を ちて右の種々を取し免て種と爲し給へる
 辨ふばし ちて右の種々を取し免て種と爲し給へる
 事を古事記ふた。神皇産靈御祖命と傳へぬまど。此を
 およ取れる書紀此傳の勝れるおぞ。下の件々お見えと

る事實を察て辨ふばし。但し書紀おハ大御神とし古事
 ことお少う由ありげある事どもお思ひ ちて。上件。速須
 得ある事もお容易くハ言ぐとし。 ちて。上件。速須
 佐之男命の御所爲お依て。荒御魂の徳用を察。この件此
 大御神此御量お依て。和御魂此徳用を察奉るばし。其在
 云る如く此二柱して伊邪那岐伊邪那美命の御功を続
 給ひて其御功を果し給ふ所由の何れおあり然るをそ
 れとあらはあらばけりおきかき移すもて行く事
 の因よ其事どもお成具ふぞ神の御所爲お有る依

於是速須佐之男命 赤名勝白
コ、ニ ハヤ ス サ ノ ヲノニコト
マタノニハカチマラシ
ヒノミ
命

天照大御神曰。我心清明出故。
アマテラスオホミカニニタマハクアガコ、ロキヨクアカキユ
ニ

アガウメリシニコエタリヒコニコラヨリコレニテマラサ
我所生出子得男子。因此而言
バオノツカラアレカチヌトイヒテニカチサビアラビタケロ
則自我勝云而於勝佐備荒健
テハルハハナチソノミツクダノアラハミゾウメ
而春則毀其御營田出畔溝埋。
ヒハナチシキマキシアキハタナツモノステニナレルトキニ
插放頻蒔秋則穀物已成出時。
ヒキワタシアヒハハヲウマフセクシサレキマタアマテラス
亘以絡繩馬伏串刺矣。亦天照

オホミカミノキコレメスニヒナヘトキニソノニヒ
大御神出聞看新嘗出時其新
ミヤノミムシロノシタニヒソカニクソマ
宮出御席出下陰屎麻理散矣。
アマテラスオホミカミズシロシメサテタビニマシソノ
天照大御神不知看而徑坐其
ミミシノウヘニキヨリテコレニオホミマミナヤクサミタマフ
席出上矣。由是御體舉不平焉。
カレドモシカスレアマテラスオホミカミハモテニウツク
故雖然爲天照大御神者以恩

親出意不咎給。不恨給。容出而
詔曰。如屎者。醉而吐散。登許曾。
我那勢命如此爲歟。又毀田畔。
溝埋者地矣。惜登許曾。我那勢
命如此爲歟。雖詔直給。仍其惡

態不止而轉焉。

言則麻袁佐婆と訓べし。今世人の語ふも如此る所ふ。如
此言とあて。○自は師云。即と云ふ近し。上文も自吾
子也。乃汝子也。同意の言をかく。乃とも云て。共ふも
と云と云むが如し。下文も天原自聞ま。自照。○於勝佐
備。師曰。縣居大人説ふ。進むことを須佐備と云。まこそ
約て佐備とも云て。須佐を反。今此神。宇氣比。勝給へ
御心の進める勢。荒び給ふを。勝佐備と云て。進荒ふる
意をてとて。又云。万葉一。感傷。近江。舊都。哥。樂浪。乃

もこれも。因、御神の心はきびて、因の乱を起し、都を荒せ
り。とと免るあり。今云、此、哥旧説どもハ誤き也。亦此佐
備、須佐備てふ言、是と也。種々轉し用ふる。けり。須佐之
ことおど、委曲よ。彼、万葉考よ。書されとゆ。けり。須佐之
男、申ひ御名も。此意あり。故、旧く進雄とあり。後世、物の
進み荒きを。須佐夫と云ふ。多し。○營田は、師云、都久
陀と訓べし。下第百五十六段。作高田則可營作。澹田おど見也。
孝徳天皇紀よ。和名抄よ。佃豆久太と何也。○畔を。記ふ阿
營田とあり。和名抄よ。佃豆久太と何也。○畔を。記ふ阿
を書り。師云、和名抄よハ畔。田界也。和名久呂。阿世と何也。
ども古は阿と此み云也。阿世はもと畔。躬恒集よ。おの免
はる時、あるまで。苗代の。あを免ふ。いさど。扱くらげ也
ル也。○毀ハ波那都と訓べし。本書よ。毀此云。○溝埋。埋を
波那豆と何也。

宇豆米とも。古語拾遺よ。美曾宇女と何る。小依て。宇米と
訓べ。ルれ也。訓ばし。師云、和名抄よ。釋名云、田間之水、曰溝。和名三曾と
何也。けり。畔を離れ。其田、よくは。子とる。水を涸しまと
水の多う。候時は。外と。漫り入て。溢さむ。爲此態あり。田
を混さむ。此爲あり。と云。小は。非也。おの種々の。悪行ども。
残春と秋と。よ分て云。中よ。此。春此事と。けり。水此
免免あり。溝を埋。水を引。ける。を妨げむ。と免あり。○
樋放ハ。師説よ。溝よ。まれ池。小ま。ま。構へて。常。小。板。もて
塞て。水を畜へ。置て。其水を。田よ。引用。ふべき時。よ。の板
此。せきを。ば。放。事。ある。水。の。用。あ。き。時。小。を。外。ち。泄し
て。田よ。水。を。溢。れ。止。め。且。用。何。る。時。の。免。く。ハ。へ。を。失。ハ。志

むるありとあり。○頻時レキマキ古語拾遺古語志に重播古語志とあり。依り依り。門人竹内高庭云。頻ハ重あり。神代紀レ。此を重播種子と書る意あり。稻種を一度播置レ。上へ又重レ。祓て播レ。苗籠レ。生レ。莖レ。どち宜レ。あらば甚レ。妨レ。とあり。凡レ。按レ。小東寺所藏應徳二年五月。東寺領伊勢国大圀庄。庄司僧圓順レ。解狀。權禰宜延能レ。妨行を停止レ。む事を申請レ。ふ文レ。云レ。他人耕作下種レ。後以四月廿八日反播レ。殖期。另レ。古躰レ。あり。古作庄田重押時レ。年來庄田四町七反レ。籠作レ。不致辨レ。恣振行不善不安レ。云レ。右件禰宜籠作庄田レ。毎年官物致未進レ。云レ。耕作違期之刻レ。下種之上重押時レ。種致妨レ。爲停

止言上如件レ。云レ。とあり。其頃レ。おち。重播種子レ。の悪行レ。志レ。る者。あり。籠作レ。とち重時レ。して。苗レ。此籠レ。生レ。ひ蒸レ。れ。枯レ。おどあるを云へり。ぞ聞レ。也。此事物レ。見え。とるレ。希レ。らし。けまレ。書出レ。とあり。云へり。○亘レ。以絡繩レ。おち。いり。小爲給へる事レ。う。思得レ。さまレ。ぞ。猥レ。ひ。繩レ。おち。引レ。亘レ。して。妨レ。げを爲給ふことあり。べし。○馬伏レ。ち。次小見レ。ゆる。服屋レ。の棟レ。を穿ちて。斑駒レ。を墮入レ。給へる。あどを思ふレ。よ。稻レ。此レ。よく實レ。生れる時レ。小馬レ。おち。引入レ。れ。伏レ。ち。め。て。害レ。ひ。給へるを云ある。ばし。○串刺レ。神代紀レ。小素レ。彘レ。鳥尊レ。之田レ。亦有レ。三處レ。號レ。曰レ。天レ。檝レ。田レ。天川レ。依田レ。天口レ。銳田レ。此皆レ。磽地レ。雨則流レ。之。早則焦レ。之。とあり。

正。櫛も串も同じらまむ。かの天、櫛田と云へるハ、田の泥
中、櫛ありて、下立ち難うゆらむ。其田の如くふせむと
て、大御神の御田、杭串あどを刺て、田人、足害ハせ。
たりに立せじと、妨げ給ひし、例、紀の一書、挿籬
と、何正、扱今の世も、恨ある人の田、木竹、切くひを
埋みて、妨をおし事、あ、有、あとお正とぞ。○新嘗ハ、師
説ふ。爾比那閉と訓べし。雄畧卷の姦、哥、ま、と 那閉之、
饗の約正とる、例、ま、と、阿と那と通ハし、云、例、多、け、新、稻
を以て、饗、は、る、を、云、名、あり、と、何正。お、木、那、閉、ま、嘗、字、を、書
大嘗を、大嘗と云ひ、毎年のを、新嘗、分て、云、ふ、あ、どの、事
をも、委、く、辨、へ、ら、れ、と、る、ま、そ、を、清、寧、天、皇、卷、り、注、さ、手、

はて此、新嘗を、始、て、營、給、へ、る、御、田、小、成、と、る、稻、を、始
て、聞、食、あ、る、故、信、の、新、嘗、小、を、有、ら、正 爾比那閉て、
お、新、嘗、字、を、書、お、れ、ど、 ○聞看師説ふ、應神紀、聞看、豊明、
一、事、お、お、思、滋、ら、し、を、 皇極紀、御新嘗、今、云、お、不、例、を、多、く、引、き 此言、此、意、を、上
み、委、く、云、る、が、如、し。今、云、此、説、を、第、九、段、 此、よ、て、ハ、食、給、
所、知、看、の、処、に、注、せ、り、 此、よ、て、ハ、食、給、
ふ、こ、と、あ、り、ま、と、後、世、小、を、も、は、ら、神、小、祭、る、事、と、の、み、思
布、終、ま、む、然、も、非、交、神、も、奉、正、人、も、饗、し、自、も、食、已、ち
れ、ゆ、か、く、ま、む、今、大、御、神、の、聞、食、は、新、嘗、も、此、意、を、以、て、見
べ、し。此、の、新、嘗、を、と、る、神、小、供、奉、と、る、ふ、こ、と、 何正、此、の
文、の、趣、ふ、て、大、御、神、小、み、食、賜、へ、る、状、小、見、ゆ、れ、む、も、次、

段ふ神之御衣を織し免賜こと此見ゆると合せて思ふ
 み神もも供奉とま子るまや炳場し其神を次段○新宮。
 此ハ新とあまハ新嘗聞看以料よ新造とるふ宮あり
 去れ新饗を重みし齋ましをれ也雄畧天皇卷の采女が
哥まと太后此御哥ふ
 尔比那閉夜とあるを新嘗屋
 よて此よ由あ依事あるべし
 けて新嘗は元を朝家のみ
 あらび下くまであはて爲し事おて其時ハいみじく齋
 慎免は趣あるを此の元此所由り因るまとあるべし其
 を万葉十四下總因歌ふにちど此葛飾早稻を爾倍
 ともそののあしを戸よ立免やも袖中抄よ爾倍はと
もとを田舎よ始免
 て早稻を刈て物して里隣の者集て食をば尔倍はと云
 ありとあり師云哥意をく此尔倍を以る節を慎て門を

も閉て外人をかよく入ればされども加あしく思ふ男の
 來あむ門外よ立せてはた免とらじ内子入てむと志此
 せ免て淡き由を免あり家持家集と云物よ我宿の
 早田かりあげて尔倍はとも君が使をとくおをやらじ
 とあるハ右の哥をあまと同卷東ふ免れぞあの屋乃戸
 ほしと依も此あり
 ねそまる爾布奈未ふ我が夫をやびて齋ふこ此戸字師
云
 尔布奈未尔比那閉を東詞よかく云るあ也上野因の新
 田をも和名抄よ尔布太とあるせりさて哥此意を加
 此尔閉を以る所へ夫をやりて妻の家よ留居てを免る
 あり人れ許る尔閉よあきと依あとおても家の戸をさ
 して慎齋ふあとお見ゆさる時よ来て戸あどある字以
 を押て開むと以るを誰ぞと咎とるあり
 て知はしあの意は子の歌餘因くふ聞えさるをあると
 まふ傳漏しあ依れらむくもしくを東因くふは殊うこ
 の所由此残るはき由ありしふや常陸風土記筑波郡の処ふ

古老傳を記して。神祖尊と云神。こを誰神と云こと知べ
伊邪那美命のうちあらむや云諸神此處を巡行て駿河
へまど然も何ふるまじくこそ。
因福慈岳フクジノタケと聞えとめ。山ハ即到て。日暮しうバ。宿請れ依ふ。
福慈神。今日を新嘗ひとて。家内忌モイミゆる由を云て。宿らせ
ざりし故ふ。筑波岳ふ登りて。宿請れ依ふ。筑波神を今夜
新嘗ひまども。敢尊旨を奉はらて有はきとて。飲食を設
けて敬祇免キヤミツクりし故事も何まむあす。○陰屎麻理散矣を。
比曾加爾久曾麻理知良斯伎と訓べし。師云麻理を大小
便をゆるすとれり。万葉十八ふ。屎遠久麻禮。竹取物語ふ。
燕ツグの麻理置る舊屎フルヅおど何り。今世も大小便を取器を麻
雷と云も此言ぞ。○今云お

布第十二段。考合考べし。けて是所為を仲哀天皇卷。大祓詞古ふは。屎
戸ドぞ云す。今云此事を彼卷けて爾閉りて。万を慎み齋イヒ
ふるふ處子。如此穢はし死行し給ふを。荒備給ふことの
甚し死あす。○如屎者は。師云久曾那須波と訓べし。けて
如此詔ふ意を。屎の如く見るを。屎子は非也。醉て吐散ハキチラち
る物ぞとれり。おは屎お依あせハ知看あがら。屎うあら
ぬさまふ。詔ひあせるれり。抑醉て吐は。己おと得交處を
も擇エラみあすぬおと何り。又屎とす。穢も淺き故ふ。かく
詔直し給ふを。御恩愛の深きぞかし。或人問此の御詔子
依まむ此時既ふ酒
を有しう。篤胤答。惠比と云言を。酒も限るおと。非交。世
うも船ふあふ。駕ふあふ。人ふあふ。おと云とぐひ。惠比て

ふことを何よも云を思ふべし。故記傳に酒子酔て云云や言れし。その酒てふ言を省きて此ふ取れるあり。○登許曾を語辭あり。次あるも同じ。○如此爲歟米を良牟と同くて推度辭あり。と言れし。依れ。米は許曾此結あり。○地矣を登許呂袁と訓べし。惜登ハ本。阿多良斯登とあるを師説ふ依て字をあらて於。その師説を記傳首見ちて此御言を。師云田みあるはき地を費して畔を毀ち。溝をも埋て其地をも皆田ふ爲むとの所爲みよそ有。免と云意あり。此も惡を善に詔直し給ふ。去と右り同じ。一ッ。一ッ。我那勢命と詔ふ。弟命を親愛み所思看に御心此程見えて。甚も有が多くこそ。○雖詔直給大御神の加

く見直し詔直し給ふことは上。第二十 七段 小委く言る如く。神直毘。大直毘。神の和御魂。小坐まはぐ故ありけ。其を祝詞に。神直毘。命。大直毘。命。見直志。聞直志と云ひ。神直日大直日爾。見直志。聞直志。おどあると合せ考へて。此理を辨ふはし。○轉焉。轉。一字を。宇多氏。阿理と訓む。場を語終みとりて。置。師言ふ。是を本と。有。おとの愈進て。殊。小甚。あくあるを云言あり。万葉十二。何時。おも戀。ば有。とは有。びとも。う。あて。比來。戀の繁も。ま。二十。ふ。秋。とい。牙。バ。心。ぞ。い。と。支。宇。多。氏。け。み。花。ふ。素。ぞ。子。て。見。は。く。不。正。う。も。あ。ち。多。う。正。開。て。見。る。べ。し。源。氏。葵。卷。み。紫。上。の。髪。の。あ。と。を。う。と。て。所。せ。う。も。あ。る。う。形。い。う。ふ。お。ひ。や。ら。む。と。あ。ら

むと云ひ同卷よ年ごろあはまと思ひ聞えたるをかこ
はしよもあらざりなり人の心こそうとて何ゆものハ
何を云くおまらもいと此等ふて心得べし轉字を書は
と甚し丸ある意あり
轉進む意を取あるはしと何也お布此言の種くふう
おまるさまを委く記
し置れおるを其在安康天皇卷宇多氏物云王子此処武
烈天皇卷設奇偉之戲と何る処おどよ注せり合せ見る
は此ふ依てお布按ふ宇多氏此宇多宇都流の宇都もと
同言あるべし宇多く寢宇都く寢同言あるは
お布おるおど思ひ合はべし扱此ふ轉
と云おきて此次よ其うゑて何る所行を云也○上件速
須佐之男命此荒ませるおとを此ふ取總て言は禍津日
神の御心ふおむ有るは然るを此神伊邪那岐大神のい
多く汚穢を惡み給ふ神靈ふ依て生坐し須佐之男命此

荒御魂として屬副坐にぐ故よ須佐之男命の神性此本
とめ穢事を堪忍あるふこと得給てぬを初免大御神此
御命蒙也宇氣母智神の許ふ到とる牙依程までを御心
此いぞ穩お坐ませるを彼神此尻口とめ出とる物を以
て御饗進也給ひしうば彼穢る堪とまはぬ御心此熾ふ
起也我尔然る穢物進るをいのおぞとおも布て也ま
し彼神を忽お擊殺し給ひその御健心のお布熾お依よ
疾く天上お歸坐して具ふ其事を白し給へ依其御心を
推量奉依り然る汚穢き所爲ある神を殺おるハ實も然
る事と大御神の詔ふはくも所思看けむを却也甚

く御怒坐して。汝を惡神と咎とるひ。相見じを詔ひて。志はしの程うは有しうぞ。離りて住ませるおど。御心の外ある御事れるう。憤ろしくも所思看から免ぞ。姉命此御怒よむ。面勝あるふことも得爲とまはて。畏は正坐れむを彼穢むしく忌ハしく所思看ハ神の體よ。生まる種くの物を。大御神の御覽して。此を顯見青人草の食て活べき物ぞと。甚く喜バして。殖生し給ひ。蠶を養ひおど爲給ふを。いぞ益あく穢むしく所思看て。いとまほまは御荒心の熾みぬりて。それ止てむと所思看ハものうら。大御神此ものし給ふ御事おまむ。謂おく妨げ給ふ事

は得爲とるはて。御誓よ勝ませる。勝布こ正の御態よおとせせて。かくを荒び給へるお依はし。其を始り男御子既み我勝と詔ひ。天照大御神も許諾とまへり。其を上第三十五段み。天照大御神方。知看須佐之男。命之固無惡心矣。とあるを思ふべし。かく事の定とる。此ままと如此吾勝ぬと云て。荒び給ふことハ。事をとせ給ふあらでいり。其やぐて。荒御魂の進ふゆり。世の學者とち此謂べ。徒小空理を此み云て。此を思をさる。い。う。お。そ。や。さ。て。書。紀。一。書。み。日。神。之。田。有。三。処。馬。号。曰。天。安。田。天。平。田。天。邑。并。田。此。皆。良。田。雖。經。霖。旱。無。所。損。傷。其。素。彘。鳴。等。之。田。亦。有。三。処。号。曰。天。檝。田。天。川。依。田。天。口。銳。田。此。皆。磽。地。雨。則。流。之。旱。則。焦。之。故。素。彘。鳴。等。妬。害。姊。田。云。く。と。あ。る。を。い。と。く。誤。ま。る。傳。お。り。上。よ。云。る。如。き。謂。の。あ。れ。む。須。佐。之。男。命。の。御。田。を。營。り。給。ふ。べ。く。も。非。な。ま。し。て。妬。害。姊。田。お。ど。あ。る。を。あ。り。し。こ。更。お。此。命。の。神。性。に。か。く。る。本。因。を。失。と。依。謬。傳。ふ。そ。有。ら。る。師。説。も。い。ま。ど。故。前。後。の。御。荒。此。狀。を。見。委。く。思。ひ。得。ら。れ。ぎ。依。趣。あ。り。

る小總て宇氣母智神の神靈もとて成れる事どもを
此み妨ふるし。少くも餘此事をぞ害ひ給はざ依をやと
く事實小心を
著て考ばし。

天照大御神御坐忌服屋而織

給神出御衣出時速須佐出男

命穿其服屋出棟而以天斑馬

生剝出逆剝剝而所墮入矣。於

是天照大御神見驚動而以梭

傷身發愠而乃入天石窟。閉石

戸而刺幽居矣。命坐齋服殿而

織給神出御服出時須佐出男
命見出逆剝天斑駒而投入殿

内ヌチニ矣キ。爾コニ雅ワカ日ヒ女メノ命ミコト驚オドロキ而テ墮オチ機ハタヨリ以ニ
 所モタ持ル梭ヒ傷ソコヒ體ミヲ而テ神カハ退サカリマシキ矣キ。故カ天アマ照イラス
 大カホ御ミ神カミ謂イフ須ス佐サ出イデ男ヲノ命ミコト曰イハク汝イマレ猶ナホ
 有アリ黑キタキ心ココロ不ズ欲ホリセ相カヒ見ミマク詔イリタマヒ出イデ乃スナチ入イリ天アマ
 石イハ窟ヤニ而テ閉タテ爾コニ天アマ原ハラ皆ミナ暗クラク天アマ下ノ悉シタコトクニ
 著ツケタマヒ磐イハ戸トラ矣キ。爾コニ天アマ原ハラ皆ミナ暗クラク天アマ下ノ悉シタコトクニ
 闇クラレ因ユレ此コ而テ常トコ夜ヨ往ユク故カレ庶モロクノ事コト燎トモシヒ火ヲ
 而テ辨ワキマ矣ヘキ。於コ是ニ惡アラブル神カミ出イデ喧ナヒ響ナヒ如サ狹サ
 而テ辨ワキマ矣ヘキ。於コ是ニ惡アラブル神カミ出イデ喧ナヒ響ナヒ如サ狹サ

蠅バヘ皆ミナ涌ナ萬マン物モノ出イデ妖ワザハヒ悉コトクニ發カコリ矣キ。

忌服屋イミハタ之ノ師シ云イハク伊美波多夜イミハタタヤと訓ムべし。忌イミを伊牟イ牟と訓ムを非
 ぬぐひみぬ伊美イミと仮字カキを付ツケばし。さて口クハ伊牟イ牟書紀イハヒ了シ
 と聞クゆる如ニく誦ノむむおのおのぢうら此コノ音ネ便ニあり書紀イハヒ了シ
 は齋服イミハタ殿ドノ織オリ殿ドノおど何ナニゆ。忌イミと云イハクを神御衣カミミソノを織屋オリある故ユ
 子コ方カタを齋慎イヒツシむゆるおど。齋斧イヒツシ齋鉏イヒツシ齋柱イヒツシおど云イハクも同じナシ。さ
 此コノまでの文フミを古事記コトワザま○神カミ之ノ御衣ミソノ也ナリ。本書ホンショみハ之ノ字ジ無ク
 と書紀イハヒみよりて記シせり。○神カミ之ノ御衣ミソノ也ナリ。故ユ師シも加牟美カムミ
 曾ソノと訓ムれぬまどさてハ神カミ字ジ守モリ辞ハジメとありて此コノ神カミ能シ美ミ
 うおむぬ故ユ今イマを書紀イハヒふ依ヨリりて之ノ字ジを加ツケへ故ユ神カミ能シ美ミ
 曾ソノと訓ムべし。但シ美ミ志シと訓ム神カミ小獻コノミヤ給タマフ御衣ミソおど其ソノ神カミ
 は。豐宇氣毘賣トヨウキヒメ神カミあるおと決ツクし。師シ云イハク此コノ大御神オホミカミの祭マツル給タマフ
 神カミを天アマ神カミと云イハク説ツクを宜ヨシ

し然るを其天神を天日のおやくいひまよと自心神を齋
ふるふおど云説を例此論不足と云れおまどその宜
ちと云れとる天神ぞ其由を言はば此神速須佐之男命
せ云説も宜ららば
ふ殺さえ給へるを其御體ミカミふ生れる物等を大御神の取
し免て種子と爲給するを思ふ其神徳イサツふ依て生れる
物を殖給ふれまば其御靈を祭とるふべき謂と依くお
布言は皇美麻命御天降の時了豊宇氣神を副給ふと有
を思へし既く殺さえ給へる神を副給ふと云るは其御
魂の謂イヒふあらばして何ぞ然まむ上り聞看新嘗とある
は新稻此初穂を此神カハふ饗奉とるひて御自も聞看し此
の神御衣を初て蠶養コガヒして抽ツキふる御絲を以て御衣を織イラ

し免まば此神カハふ獻給ハむとの事あり斯在カレば天照大御
神の豊宇氣神を祭給へるを神祭此權輿イシふおむ有ける
う儀しこそ後世まで荷前祭神衣祭のもろもけりて書紀
ろ御祭の中おもとも重き御祭ミマツふ有りり
本ふ天照大神方織神衣居齋服殿カク有るを師の書紀
文ふカク有るを師の書紀
ふもカク有るを師の書紀
云れしハ何不見混へられむとや何也此ふを織し免
給ふと何也彼と此と事違へるふ似ぬれど八千く比
賣命ふ織し免給ひけりも御親ミマツも織給へるを書紀了は
大御神の織給へる事のみを傳了此傳た織し免給する
事此み傳へと依れり大御神此神室ミマツふ機具のミマツ有るを見
ることをけりてかく御自も其服屋ハタヤに坐て大御手をさす
曉依べし

ふ。副給ひ。御^ミ梓^{ホコ}命を。其事を掌^シる。司^{ツカサ}を爲給ふ。凡て神事を重く志給ふ故。此も熟^{ツク}み考^カれ。後の人草を愛み所思看^ミる。大御心を。豊宇氣神の神靈也。彌益^{イハス}ふ靈幸ひ坐^マむ事を。禱^{ネガ}ましての御事^{ミコトコト}もあむ。依^ヨり乃依^ヨ。御覽して。此物等ハ。青人草の食て活べき物。○穿^{ウチ}屋棟^{ヤノムネ}也。と喜^ヨ坐^マるを以て。察^{サツ}ひ奉^{ホウ}るべし。穴^{アナ}とふと。○穿^{ウチ}屋棟^{ヤノムネ}也。本書^{ホンショ}棟^{ムネ}ハ頂^{タカ}と何^{ナニ}も。師^シ曰^{イハス}。和名抄^{ワナシヨ}ふ。棟^{ムネ}謂^{イハス}之^ノ。梓^{ホコ}和名無^ム禰^ネ也。今^{イマ}正字^{テイジ}を書^カけ。字^ジ鏡^{キョウ}不^フ。檣^{カサ}楹^{カサ}上^ノ。横^{ヨコ}亘^ヒ者也。棟^{ムネ}也。牟禰^{ムネ}と何^{ナニ}也。按^{オシ}ふ。忌服屋^{イミフクヤ}ハ。四方四角^{シヨウシヨウカク}を。堅^{ツヨク}く戸^{カド}ざし。固^{ツヨク}免^メとる屋^ヤありと見^ミ也。されど。棟^{ムネ}を穿^{ウチ}ちとるあるは。○天斑馬^{テンパンバ}。師^シ云^{イハス}。和名抄^{ワナシヨ}ふ。駮^ハ馬^バ俗^{ソク}云^{イハス}。布知^{フチ}無^ム方^{ハフ}。說文^{セツモン}云^{イハス}。駮^ハ不^フ純^{ジュン}色^{シキ}馬^バ也。俗^{ソク}云^{イハス}と。

あれども。俗^{ソク}稱^{ショウ}と云^{イハス}。後^{ノチ}世^ノよは。夫^{ソノ}知^チと濁^{ニグ}めて云^{イハス}。牙^ガども。凡^{ソト}て首^{カビ}を濁^{ニグ}る言^{コト}は。古^コを無^ムれど。布^フを清^スべし。今^{イマ}世^ノよも。清^スとあ^アけ。馬^{ウマ}を宇^ウ麻^マ古^コ麻^マは。万^{マン}葉^{エフ}十四^{シヨ}ふ。古^コ宇^ウ馬^バと。あ^アけて。馬^{ウマ}を宇^ウ麻^マ古^コ麻^マは。馬^{ウマ}とも免^メ也。駒^{コメ}よ。馬^{ウマ}子^コあ^ア也。と和名抄^{ワナシヨ}ふも云^{イハス}まど。古^コを馬^{ウマ}を古^コ麻^マと多く云^{イハス}。今^{イマ}も然^{シカ}訓^{クニ}べし。書^{シヨ}紀^キハ。即^{ソコ}斑^{ハン}駒^{コメ}と書^カれ。○生^{ナマ}剝^{ヒキ}之^ノ逆^{サカ}剝^{ヒキ}く。而^{シテ}は。伊^イ禰^ネ波^ハ岐^キ能^ネ佐^サ加^カ波^ハ岐^キ爾^ニ波^ハ岐^キ氏^シと訓^{クニ}べし。此^{コノ}古^{コノ}事^{コト}記^キハ。逆^{サカ}剝^{ヒキ}剝^{ヒキ}と何^{ナニ}を。今^{イマ}私^シよ。かく文^{モン}を重^{オモ}禰^ネて書^カる。此^{コノ}古^{コノ}言^{コト}の。皇^{ミコ}卷^{マキ}ふ。生^{ナマ}剝^{ヒキ}逆^{サカ}剝^{ヒキ}と重^{オモ}禰^ネ云^{イハス}る例^{レイ}も依^ヨり。其^{ソノ}古^{コノ}言^{コト}の。生^{ナマ}剝^{ヒキ}逆^{サカ}剝^{ヒキ}。生^{ナマ}剝^{ヒキ}逆^{サカ}剝^{ヒキ}。尾^ビは方^{カタ}と。皮^{ウダ}を剝^{ヒキ}あ^ア也。逆^{サカ}剝^{ヒキ}くと重^{オモ}て云^{イハス}は。皮^{ウダ}を剝^{ヒキ}盡^{ツク}せる状^{カタ}を。強^{ツヨク}く云^{イハス}る古^{コノ}文^{モン}也。此^{コノ}例^{レイ}の言^{コト}。祝^{イハヒ}。此^{コノ}処^{トコロ}に注^{ツク}べし。け。て馬^{ウマ}を。宇^ウ氣^キ母^ボ智^チ神^{カミ}の頂^{タカ}ふ生^{ナマ}れる。

物あるを惡ましてあす。上件種々の惡事此目垂仁天皇

○見驚動而之。荒き所行を見て驚給へ依あす。○天石窟

之。師云。必しも實の岩窟ふを非じ。石と之。あす。堅固を云

るふて。天之石位。天之石鞞。天之磐船あどの類ふて。あす

尋常の殿をかく云ふ依べし。書紀に岩窟とある文御

孫命此天降坐處も引開天磐戸と何依も尋常此殿戸

をかく云す。豊石窓柳石窓も石を多堅きことふてと

押披氏云くと云るを思はし天津神いおも岩屋ふおと

の石を祝と云ふことありと云を非れりちて万葉十二

ふ。屋戸閉勿勤。あは屋之戸を屋戸と云ふ例あり。まよ三

戸ともと何す。篤胤按ふふ。此をあ布眞の石屋れす。然る

は。前ふを常此屋ありし故う。棟を穿とれぬ。かま今度

を岩屋も籠す給へる依依べし。○閉師云。多氏いと訓べ

し。万葉三ふ豊因乃鏡山之石戸立隱爾計良思あこの立も

闔を云す。今世もさて闔を立と云所思ハ。懸居大人説

ふ。上代ふを戸を常を傍ふ取退置て。闔むとて之。其を持

來て立塞ゆるあす。と云まき。後世の遺戸を此を便とく

戸を上代をり何ゆ。○今俗よ。○刺幽居矣師説ふ。刺は闔

とる戸も。物を刺て固むる字云。万葉十二も。門立而戸毛

閉而有乎。まよ門立而戸者雖闔まよふて。多都留と。佐須

少此差^{ソキ}何^レ依^ルおとを^レ知^ルは^シ。万葉^ノ尤^モ久留^ル爾^ノ久^ク枳^ギ作^ル之^ヲ加^フ
多^ク米^ノ等^ノ之^ヲ。久留^ル之^ノ戸^ノの^ノ樞^ノあり久^ク枳^ギは^シ釘^ヲあり和^ノ名^ノ抄^ノ。扁^ノ度^ノ
佐^ノ之^ノと^レ何^レ。此^ノも^ノ戸^ノ字^ノ刺^ル固^クむ依^ル物^ノれ^ル故^ノの^ノ名^ノありと^レ何^レ
也^ニ。幽^ニ居^ル也^ニ。本^ノ書^ノふ^レ許^コ母^モ理^リと^レ何^レる^レ哉^ニ。書^ノ紀^ノふ^レ依^テ字^ノを^レ何^レて
扱^テ。此^ノ石^ノ屋^ノ戸^ノに^レ隱^モ坐^ルる^レを^レ崩^カ坐^ルを^レ此^ニ云^フる^レ也^ニ云^フ也^ニ。
師^ノの^ノ言^ハま^シと^レ如^ク。例^ノの^ノ漢^ノ意^ハ此^ニ推^シ度^ハふ^テ。太^ニじ^ニた^ニ邪^ノ説^ヲを
也^ニ。師^ノ云^フも^シ日^ノ神^ノ崩^レ也^ニま^シふ^レ也^ニ。此^ノ世^ノを^レ滅^スぶ^レは^シあ^リし^レ也^ニ。○常^ノ夜^ノ往^ルは^シ師^ノ云^フ。
登^ル許^コ用^コ由^コ久^クと^レ訓^ハは^シ。等^ノ許^也未^ト云^フこと^モ万^ノ葉^ノ十^五ふ^レ非^レ
也^ニ。常^ノ夜^ノと^レを^レ常^ノふ^レ夜^ノのみ^ニふ^テ。書^ノふ^レき^を云^フ也^ニ。往^ルと^レを^レ凡^シて
年^ノ月^ノ日^ノ時^ノの^ノ經^ル往^ルを^レ云^フ也^ニ。あ^リは^シ書^ノの^ノ無^クて^レも^シ夜^ノのみ^ニふ^テ。

時^ヲを^レ經^ル行^ク也^ニ。万^ノ葉^ノ四^ノふ^レ相^ノ夜^ノ不^レ相^ノ夜^ノ二^ツ走^ル良^ク武^ク。相^ノ夜^ノ行^クと^レ。
と^レニ^ツま^シと^レ空^ノ蟬^ノ乃^レ代^也也^ニ毛^二行^ク也^ニ。人^ノ世^ノは^シ死^テま^シと^レ二^ツ度^ノ九^ノふ^レ。
常^ノ之^ノ倍^ニ爾^ノ夏^ノ冬^ノ往^ル哉^ニ。此^ノ正^シしく^レ此^ノと^レ同^ク。○今^ノ云^フ也^ニ。後^ノ撰^ル集^ノ
了^ル。や^とひ^ふ閏^ノ月^ノ何^レる^レ年^ノ云^フ。貫^之何^レる^レ也^ニ。子^ノ有^テ行^クは^シ
き^年久^シも^云く^レ。是^レ等^ノの^ノ行^クふ^テ心^ヲ得^ベし^{。仲}夜^ノ而^{シテ}經^ル多^ク日^ノ。
時^ノ人^ノ曰^ク常^ノ夜^ノ行^ク也^ニ。此^ノを^レ故^ニ六^ノ合^ノ之^ノ内^ニ常^ノ闇^ニ而^{シテ}。
不^レ知^ル晝^ノ夜^ノ之^ノ相^ノ代^也と^モ。於^レ是^ニ天^ノ下^ノ恒^ニ闇^ニ無^ク復^シ晝^ノ夜^ノ之^ノ殊^也と^モ。
何^レ也^ニ。或^レ人^ノ此^ノ事^ヲを^レ疑^ヒて^レ天^ノ日^ノを^レ二^ツあ^キを^レ此^ノ時^ノ吾^ノ邦^ノのみ^ニ
殊^ノふ^レ愚^クある^レ疑^ハり^也。他^ノ國^ノに^{シテ}も^シ非^ズ也^ニ。如何^ト云^フ也^ニ。此^ノを^レ知^ル
れ^ルる^レも^シ漢^ノ籍^ノに^{シテ}見^ルこと^モあ^リし^レ也^ニ。何^レを^レ以^テ知^ル
彼^ノ國^ノの^ノ何^レ代^ノ也^ニ。何^レれ^ニを^レ思^フふ^レも^シ。抑^シ此^ノ時^ノに^{シテ}は^シ
こと^モあ^リし^レ也^ニ。有^レ無^ク知^ルべき^も非^ズ也^ニ。され^ド日^ノ神^ノの^ノ隱^モ坐^ルる^レ也^ニ。

れむ。万圍共子常闇。○故庶事燎火而辨矣。此一句古語拾
遺を取て記せぬ。記紀共此事の見えざるハ。此を決
絶て然有はき傳ふ。さて火字木燭とあり。○惡神は。
阿羅夫流神と訓べし。其在下。第六段。荒振圍神とあると。
全同じきれぬ。此事委く彼。○喧響を。書紀ふ。此云。淤
等娜比と有ぬ。本書了音字を書るを。師云。此言中古の物
語をぞよも多く見えて。淤登那布とも云ふ。○狹蠅師云。
書紀ふ。五月蠅と書る字の如く。五月ごろの蠅。然る
を。佐都伎といはて。佐と比み云。田植る農業を。凡て佐
と云。その苗を佐苗。早苗をしてハ。植る女を佐少女。植始

む。依を佐開植終るを佐登。おど云。グ如し。さては。其業
はる月字。佐月と云ひ。佐ハ田。云ことあり。夜都米佐須
ネ。皆同じ。佐月をさ。お。月。其頃の雨を佐亂と云。乱
と心得る。本末違へり。其頃の雨を佐亂と云。乱
を久しく雨ふるを云。源氏物語。風雨を空の乱と云。佐
ま。和名抄。麥李。麥秀。時熟。故以名之。漢語抄云。佐毛く
とあり。此佐も同じ。か。ま。ば。狹蠅も。田植る頃の蠅と云
謂。ち。依。ス。モ。あり。意。此。稱。ふ。其。頃。殊。ふ。此。虫。を。多。う。依。故。ふ。名。を。負。る。ハ。也。
○如字。師云。那須と訓べし。碁登久の古言。よて言。本は。似
に。ある。は。し。那。と。尔。と。通。音。ある。う。子。那。須。を。能。須。と
訓。む。お。ど。を。合。せて。思。ふ。似。を。漢。籍。よ。て。ノ。レ。リ。を
依。を。那。須。と。云。お。ど。の。ぞ。此。辭。輕。太。子。の。御。歌。加。賀
美。那。須。阿。賀。母。布。都。麻。と。見。え。万。葉。二。ふ。五。月。蠅。成。驟。騒。舍

れる妖氣あらざりしこと明けし。去べて師の須佐之男命禍津日神の事を言れし説ども不む甚く違へる事ぞ多し。亦深く考ふる。伊邪那岐命の豫母都圀を還坐て。御禊し給ふ時。投棄給ひし。彼圀に汚穢ふれし。御服物ふ成れば。水陸に神等の所爲ふて。成まる處に言ふ事。此神等此喧響立て。万物の妖氣を起どもを合せ考へし。志る依ありぬ。其在神代紀皇美麻命に天降坐む。依處に彼地多有螢火光神及蠅聲邪神復有艸木咸能言語といひ。まに磐根木株艸葉猶能言語夜者若燦火而喧響之。畫者如五月蠅而沸騰之。おとほるを熟思ふ。言ひ語まじ死磐根木艸おとの荒び起し。螢成邪神の音ひ

立て。喧げせまる状に聞ゆるをや。然らばに磐根木艸の亦不言は。此邪神等を攘平した。武甕槌之男神に坐をその語止とるふと。巡行とるふ時。岐神を嚮導と爲給へ依を思ふ。此神に。豫母都圀を起來る妖鬼を追放。あまふ功の坐也。此事第二十二段。小委く注り。嚮導と爲て。豫母都圀に穢り成る依妖神を攘。ハむとの事。亦依をや。事。下第百廿三段。小委く注ふを見る。かくまは。此時起まる妖氣は。須佐之男命の荒びに依て。天照大御神の隱坐し。大御神の隱坐るふと。去得て。彼邪神等起立ち。音おひ立とる妖氣。もて。もを須佐之男命の御荒びとゆ事起。おまど。此神

の御心も禍津日神の御心も非安あむ。世の古学は徒の然る
本此謂を尋ねて一向に悪事とし言を須佐之男命を禍津日神と云ぐ慨とさよかく委く辨へ言ふよあむ
○或人問前ふ天津日比御国をその萌騰れ依初とて清
明く透とる質もて其上より火を寄おきてある故ふいと
と明くけて天照大御神の所知看てとて其大御光りの
照徹めて彌く益々明きとし云ふ。此を古傳の趣也然有
げふ聞ゆるを。此説第九九段に注りき此時大御神は隠坐るよ依て。
高天原も葦原中固も常夜往まで暗のてしといふ。答。
此時の事を八十禍津日神の甚く荒び坐て高天原の君
と坐まは天照大御神を堪とまをばて幽居しのは餘

母ろくくは神等も御功德の止給ひらむ事推て知はし。
然るをまば天比萌騰れる初とて澄明うる質あるを去
ま産靈大神の造成給へ依あまは其御靈を因て明ら依
を其ふ火に寄おきて輝ぬを火産靈神の神靈よ因るを
せぬ也然るよ其神とち此各くそは神徳止と給ひぬ
まむ悉ふ暗かてしと。然有るべき謂あて。此時火神御
庭火あどむのゆの是ふ就ても天照大御神の御徳は大
御功ぞのこりな依。功をぬく燭
ある事想像に奉るはし。次文ふ八百万之神甚憂と云ひ。
高皇産靈神さすふ大御神を出し奉らむと千ぢふ御心
を盡し給へるをや。伊邪那岐大神の不有如此靈異
之御子と詔へるををく思べしまと

此時の趣を察て速須佐之男命。まゝ其荒御靈。八十枉津日神。此御稜威。此畏く坐まは事をも。想像ゆ奉る。はし然。むらじ靈異。坐まは。大御神。去ら。志むし。堪給。てびて。天。石屋。幽居。ませる。を。や。然。有れど。伊邪那岐。大御神。の。そ。此禍。を。直。ち。む。料。ふ。生。置。さ。る。子。依。神。直。毘。大。直。毘。神。此。や。ぐ。て。天。照。大。御。神。の。和。御。魂。ふ。坐。ま。し。て。終。了。を。其。禍。を。直。し。給。へ。る。こ。と。次。く。言。ふ。ぐ。如。く。あ。る。を。最。も。妙。あ。る。謂。あ。ら。む。や。あ。ふ。等。を。く。思。ふ。べ。し。ふ。く。思。ふ。は。し。

故是以八百萬神愁迷而於天

ヤスノカハラ カムツドヒツドヒテ ハカリベキネギマツルワザラ
 安河原神集集而計可禱奉方
 タカミムスビノカミノミコトモチテニヤゴロ
 高皇產靈神出命以而於八意
 オモヒカネノカミシメタマヒオモハキ コノカミ アリオモヒカネノ
 思兼神令思矣此神有思慮出
 サトリフカクオモヒハカリテ マラシタマハク ウツレツクリカノカミノニカタヲ
 智淡慮而白曰圖造彼神出象
 シレシカシカノタバカリテムトマツラヲキノシマラシタマヒキ
 爲云云出謀而宜奉招禱白矣

故是天思兼神

カレコノアメノオモヒカネノカミ
亦云天

出兒天

表春命者信濃国阿智祝出祖

也次子天下春命者秩父国造

出祖也

八百万神師云八百万之數の多死至極を云也万葉ふ八
百万千万神とも言也。然るを書紀ふ八十万神とあるを
いふもそや八十神と云ひ八十木

種あど云ふ八〇神集く而此言の例在下第百六段子出
十ぞハ異あり。○神集く而そよ師説を委く注去法し
此を誰神の命ともなく己自集へる也。故師の都
度比と訓れしに依まて。都度閉をツドハ世のハ世を切
を云ひ都度比を自集。天照大御神の刺幽居して太じ死
禍事の發まるれば八百万之神とち憂はちて誰も集
子孫と神議く坐むと集ひ給ふと然有べきと小
む。此を師も言れし如く古事記書紀の傳ども皆己自
於天高市而問之と何ゆえ他神此命もて集むと書
さまおれれば彼を都度閉と訓べし然れども彼處も何
神の命といふことハ見え古語拾遺も高皇產靈等會
八十万神と云ふ中々疑ハしこも皇美麻命の御天
降此事議し給ふ處の例もちて天之安河原に上り出
依て推當し書依あるべし

そよも云、依如く、深き由ある川原あるを以て、此處に
集ひ坐るれり。下も、此川原の事多く見えたり、皆
やごとおき事議此時、集ひませり、然る
を書紀の一書、會於天、高市。皇美麻命御天降の處
ふも、然言、一書何也、と何
依ハ、處違へるふ似とれど、市と云、人の多く集、所を云言
あれど、此川原を、神等の集給ふ處、依ふ依て、市と云
云ふふて。第百廿八段、事代主、神此、因津神とちを集へ
ませる、倭此地を、天、高市と云る事、何る事も、
思ひ合、實は處の異なる傳、ふを非びあむ。○計可禱奉方
禱を禰岐と訓べし。能牟と訓む、禰具と云、一向、小畏也、
も悪うらび、
罪を赦し給ふ也。請願申は、去とれり。扱かく議給へる也。
須佐之男、命此荒び、依て、天、石屋戸を刺て、堅く幽居る

を。彼神の御爲よ。請願白し、出奉むとびる。八百万之神の
神議あす。○高皇產靈神之命、以而命、以而を御言よてと
云むが如し。但、此の三字、本書よ、抑此時の神集は、上よ云
無を、今加とるあり、
依如く、己自、集へ依ことと、論ひ無きも、此のら、其集坐
るう、牙よて、其上首とる神ハ、高皇產靈神、坐まはと。
言までも有らば、故本書の趣を、よく見依ふ、此神の、某く
ふ令、給牙る状、あすし、其を、此、了、令、思と云、ま、下、召
天兒屋根命、布刀玉命、而令、占合、あぞ、何るを思べし、此時
よの二柱神も、集ひ坐る事、去とて、著明を、殊更、召て、令
給へる。其神を、誰神、あらむ。高皇產靈神、坐さ冠、終や。然

を師の其事を言わぬれざる。故此意を得て命以而の三字を加牙文を成せ依あり。○八意思兼神。記紀ともう八意を言ふ言を無きを、とる、大神本紀よ名義を下文よ。此神有思慮之智深慮而と有る如くふて。師説ふ思ひて。万葉三小歌思辭思爲師。と云へ依思よて。思慮あり兼ハ。今云古事記よ字あり。數人の思慮る智を一此心よ兼持る意ありとあり。偕八意と云も思慮の智の卓越とる由の稱號よて。彌意あり。神名式よ。越中、国新川郡。八心大市比古神社あり。八心大市比古の例あり。あふ八意を言義命の名の処よ。注。はて此神を古事記まよ書紀の一書よ。處を見るべし。

高皇產靈神の子とあるを共混とる傳ふて實を天兒屋根命と同神あり。其由第六十段の徵傳まよ第百三十段の徵よ委く辨ふるを合せ考ふ。○今思矣。產靈大神と申せども御自思得まはぬ事は。くく下ある神よも令思て事を定給牙。皇美麻命。御天降の事議し給ふ時あどを。天照大御神も竝坐て。いおも此神よ令思とるへ。君とあらむ人あどを。此ををく思ふべき事あらむのも。○圖造彼神之象彼神とハ。天照大御神を申せ。ぎて圖造象とを。大御神の大御形容のあとよは非。よそれ大御身の御光。圖るは。象物を摸造らむと云ふ。て。即鏡れ。こをあり。其を下。第五十六段

宇受賣命の言ふ。勝汝命而貴神坐と云て。兒屋命。太玉命。此御鏡を指出示奉れるを思ふべし。古語拾遺曰。吾之所捧。宝鏡明麗。恰如汝命。とあるも。趣を異かま。○爲云く之。と。御光を因造れる事の由を。聞く。○爲云く之。謀而。本も。因造。彼神之象。而奉。招禱也。とのみ有まど。此神の思慮。非と聞。云くと。下。不設備。とる事どもを總とる言ふて。其事どもを悉く思兼神の思慮を。出るはあり。故。古語拾遺曰。思兼神議曰。宜令太玉命。云。下。ある。謀事を。記し。書紀。本文。思兼神。深謀遠慮。遂。聚。常世之長。鳴鳥。云く。竟。逐。降。焉。と記して。此云くと。切。と。云く。と。記して。此云く。不。謀事を。み。古事記。も。思。金。神。令。思。而。思。而。と。記して。此云く。不。謀事を。み。古事記。も。思。金。神。令。思。而。謀。し。お。と。云。ま。き。今。を。それ。も。依。り。て。文。を。成。せ。り。け。て。

謀は多婆加理と訓べし。ま。と。多。婆。加。理。碁。登。と。訓。む。も。惡。保。經。覽。哥。ふ。於。蒙。飛。加。祢。多。波。加。利。許。度。乎。勢。佐。利。此。を。畏。勢。波。安。万。能。伊。波。度。波。飛。羅。氣。佐。良。万。事。と。何。也。 此を畏。て刺隱ませる。と。故。不。徒。子。禱。奉。也。多。る。む。の。ゆ。り。ふ。て。は。出給ふは。じ。死。事。を。思。察。ま。し。て。謀。り。出。し。奉。ら。む。と。深。く。思。慮。ら。あ。る。は。あ。べ。し。これぞ此神の。八意あり。○奉。招。禱。を。遠。岐。能。美。奉。む。と。訓。べ。し。遠。岐。を。即。招。字。の。意。み。て。石。屋。不。隱。坐。る。大。御。神。を。招。き。出。し。奉。る。由。也。此。言。委。く。を。第。百。三。十。三。段。遠。岐。之。八。咫。鏡。云。く。と。何。の。処。も。師。説。を。け。て。禱。字。を。大。御。神。に。出。給。を。む。お。を。を。注。去。を。見。る。べ。し。 禱。白。の。事。故。不。此。字。を。書。る。は。あ。べ。し。○天。表。春。命。名。義。い。ま。ご。思。ひ。得。べ。し。○信。濃。国。の。事。を。下。第。百。十。八。段。不。注。登。し。○阿。

神名式子。武藏国秩父郡秩父神社。この社也。貞觀四年七月。授武藏国正五位下勳七等秩父神正五位上。同十三年十一月。授從四位下。元慶二年十二月。授正四位下。おど圀史ふ見也。今在大宮。妙見宮と称也。を帳考ふ云り。まよ或云へども。其社をれくて。石七。石七。石大明神と云。こま奥社あり。甲斐信濃武藏三。国。の界みて。白鳥郷大滝村といふところ。此社ある。此社あり。第六段。お委く云ふべし。

於是從思兼神出議而取天安
 河出河上出天堅石取天金山

示名天
 香山
 羅而科伊斯許理度賣命而令
 作日像出鏡全剝眞名鹿出皮
 剝而作天羽鞆用此奉造矣初
 度所造出二面者少而不合諸

夕千ノコ、ロニコハ、マスキノクニニヒノクマクニカ、スノ
神出意。此者坐木国日前国懸

オホカニナリツギニツクレリシヤタカミハ
大神也。次度所造出八咫鏡者。

示云眞其狀美麗矣。是者伊勢
經津鏡。ソノサマウルハレカリキコハイセノ

オホカニニマス
大御神也。其信野其賣命而命

河上石。師云、齊明天皇紀云、川上此云、箇播羅とある。加
波加美と訓はし。其石河上の石を用ふべき。深き所由何

正て取れるあらむ。もし師言の如く、加波良と訓べくも
み河上と書。○堅石師説ふ。雄略紀の人名、堅磐とある
を。此云、柯陀之波。まよ和名抄、筑前国穂波郡とあり。此訓
お依はし。後、世此言あらむ。加多伊波と云べきを、かく云
て、堅お附る活辞波を伊。ちて今此石を取む。和名抄、鍛冶
波の伊を畧るるれり。今加多伊波と云、秋田おてハ、今も加奈
具、鐵碓、加奈之岐とあり。今加多伊波と云、秋田おてハ、今も加奈
斯伎と云。此料あるはし、少有り。ちて安河原ある石村を。迦具
土神の血、此激越正て化れるおまむ。此時其石を用ひと
依る。所由何依るおれ。其由下。○天、金山を。やぐて香
山を云あるはし。其由を。金神の名を。金山毘古と云て。其

を迦具土神の御母を枯惱しある由の御名を依と。此時
の鏡劔代を。崇神天皇此御世に作らせ給へる時。其
金を大和の香山より取多依れどを以て。然思を依る
也。天香山倭此香山。○鐵也。久呂賀祢と云も。麻賀禰と訓
も。とハ一山あり。催馬樂も。未う祢ふく吉備の中山れど見也。鉄を
むばし。眞金といふ信友説。能因哥枕も。未が祢ふくと
をくろの祢をふくを云と有。さて鐵を取まるを。鏡刀斧
り。おれをき證ありと云へり。鐸あどを作る料れ也。信友云。元亨二年。備中。国。の民部省
圖帳。此図帳古のふもあらば。後醍醐天皇此御時出來と
へき事も少うらび。賀夜郡の條。庭妹の眞物。鐵云く。
猶別考すあり。待圀司之處分奉官家。まと松山之庄云く。假粟以鐵充其

貢代と有て。次。小庭妹。鉄胤云。妹ハ妹の誤あり。且和名抄
し。今庭瀬と。松山之領者。雄畧天皇二年始奉官家。其後連
云地名あり。綿奉之後。三條院御宇。經八九年奉眞金。其後中絶畢。已下
也。少ある眞金也。黄金を云と通也。おは既くと也。マカ
ネと云名の失果と依か。黄金をマカネとも云ゆ。心
得て。古。炎加しく。けうあら言して。然語也傳とるあるは
し。此圀。小鐵多りゆし事。圖帳の文を證せ。云べし。後三條
經八九年云く。三條院治世五年。後三條院治世四年。ふれ
む。符のとし。按。小三。一の誤みて。云く。の後。一條院御宇
あるべし。此天皇治世廿五年あり。其を後一條院とあり
しを。後三條院と誤れ。依り。此等の書ども。寫誤多く。一二
三の數字互。誤るま。と少うら。此も其類あるは。し。
又後一條院。よて。も有べし。備前。圀。圖帳。み。後一條院。治安

二年云くと云事も有り。と云也。○眞名鹿眞名を稱辭ふ
此天皇治世廿年坐せ也。○眞名鹿眞名を稱辭ふ
也。愛子を眞名子と云も。稱辭あるを思ふは。此言を第
十一段麻
奈弟子の処に。和名抄。鹿和名加と云也。然れども本語
委く注り死。加具神の処に委く
た。決免て加具あるは。思ふ由也。○全剝を本書に。此云
注べ。はて文の續きを察る。此も天香山を也。取まると
也。次段。天香山之眞男鹿と云。○全剝を本書に。此云
を思ふ。彼処に注を見。○全剝を本書に。此云
宇都播伎と云也。次段。全拔てふ言也。師言も俗に圓
ふと云意あり。全骨を抜き。全皮を剝。中の空虚。小
お依意もて。宇都と云あり。と有り。はて全剝くと重
るハ。剝盡せる事を強く云ふ也。○羽鞆を本。小波夫伎

と訓也。言義は。羽吹。吹て。羽と皮を云ふ。依は。信友云。
此を上世。皮を打はぶきて。火を熾し。麁る故の名。
や。團扇をうち。はと云も。打をぶく由の名。依は。其を
とまれ。鹿皮もて。作れ依。故。何依事。亦云。と云也。此
信。其由。所由あること。亦。はて。布伎。小。鞆字を。書るは。唐韻。
鞆。韋囊。吹火也。と云。依。亦。依。ま。る。あ。ら。む。然。れ。ど。も。此
を。必。し。も。事。の。信。を。思。ふ。は。信。友。が。説
人の説。鞆。を。天。を。也。也。也。と云。は。如。く。あ。る。べ。し。○或
こと。漢籍。小。有。り。と云。信。あ。る。は。は。て。和。名。抄。小。も。唐。韻
此。此。文。を。引。て。野。王。按。鞆。所以。吹。治。火。令。熾。也。漢。語。抄。云。
皮。袋。布。岐。加。波。と。何。依。也。令。俗。子。ふ。い。が。う。と。云。物。も。て。其

を吹皮フキガハの音便ナラフ小類シノ多依言タヨコトあり。ちて此皮袋フキガハと云物モノを漢
土ツチ此鞞シノよ倣ナラフて。作ナラフれるあるは。信友シノトモ云吹草フキクサ小狸皮シノクニを用
る。本ホ草クサ和名ワナ小狸シノを多タ介ケとあり。まマ空海ソウカイ僧ソウグ性セイ靈レイ
集ツクり。狸シノ筆フデ四管シツパンと何ナニ依ヨり。多タ古コ假字カキあるは。
多タく和名ワナ抄シヨウ小狸シノ付ツケる皮クニを用ヨウ料リョウと定サ免メて云イハる名ナ依ヨ
言コトあるは。信友シノトモ云。今イマ云イハる。医家イノカ千字文センジツモン小狸シノ和名ワナ多タく毛モウ
踏フミ鞞シノ之ノ毛モウの意イあるは。是コト等トウ此コトハ。多タく奴ヌ伎キ多タく奴ヌ祁チ小
もやうあきこと。依ヨり。事コトの序シヨ小記シヨウキし。出デ於カ。○日像之鏡ニチゾウノカガミ
とは。日神ニチノカミの大御身オホミミ此御光ミツ比ヒ如ニ鏡カガミと云イハることあり。上ウヘの
彼神カノカミ之象ノゾウゾウと何ナニあるは。云イハる。○二面者フタツツハ。此三字コトノミを今イマ加カへる
る。言コトを合アせ考カふべし。○二面者フタツツハ。此三字コトノミを今イマ加カへる
依ヨり。加カへ。知チ比ヒ佐サ久ク氏ウヂと訓ツケべし。伊イ佐サ加カと訓ツケべし。其由コトを下
依ヨり。加カへ。知チ比ヒ佐サ久ク氏ウヂと訓ツケべし。伊イ佐サ加カと訓ツケべし。其由コトを下

小見也。○不合フカハ諸神シノタチ之意ノイハヒハ。本ホ小コはあ。不合意フカハと何ナニまじ
二十一社記ニジュウイチノヤシ小諸神シノタチ不合意フカハ。まマと二十二社記ニジュウニノヤシ鎮坐傳記チンサツデンキ不
とあ依ヨり依ヨて。諸神シノタチ之ノ三字コトノミを補ホへ。さ依ヨりあ。不合意フカハ
て。伊イ斯ス許コ理リ度ト賣ウ命ノミ此意コトノイハヒ小コのみ合アへぬ由コトあるを。此
は決キ免メて然シカに有ルまじく。高皇產靈神タカミムスヒノカミ思兼神オモヒノカミを始ハジメとして
諸神シノタチいおれも小コくて。大御神オホミカミ此御光ミツ子圖シノ比ヒ意イ小コ合ア
ざ。けむと所思オモヒれば。○木キ因ヰ。即スガ紀伊キイ因ヰ。木キ因ヰ
と云イハる。下シモ第六十ダイジュウジウ段ダン。小注コツクし。○日前ヒノマ因ヰ。大神オホカミと云イハる。日前ヒノマ
大神オホカミ之ノ因ヰ。大神オホカミと云イハる。本ホ小コ是コト紀伊キイ因ヰ。日前ヒノマ神カミ也ナリと何ナニ
其由コト下シモ。神名式シノナシキ小紀伊コキイ因ヰ。名草郡ナカクサノクニ。日前ヒノマ神社ジヤ。信友シノトモ云イハる。日前ヒノマ神カミ
小云コト。神名式シノナシキ小紀伊コキイ因ヰ。名草郡ナカクサノクニ。日前ヒノマ神社ジヤ。信友シノトモ云イハる。日前ヒノマ神カミ

唐しそて風雅集に當宮の神職紀俊文朝臣歌ふ名草山
とるや柳のたきもせや神にぞあけきひのく乃此宮と
見え式もまらう訓に然るを神代紀みヒノマへと何る
を非じ今ヒサキの宮と云ひまは字音ハニチゼムグ
ウとも云 罔懸神社。信友云罔懸を天武紀ハニカス
ふぞ。カ、リとも訓を添とり令集解ハ罔懸須と書き式も
クニカ、スと有て今も然稱と云テ久ル加須と唱
ばある是あに。あほ次く言を見よ。○次度所鑄ハ咫鏡
者。亦云眞經津鏡。○此も本テ唯次度所鑄とのみ有れ
ど文足らば。あま即下見えとるハ咫鏡あること。是
を伊勢大神也と云る。あま炳焉。ハ咫鏡を本書古事記了。
々まハハ咫鏡者四字を加へ於。ハ咫鏡を本書古事記了。
ハ尺鏡と書て本注ハ訓ハ咫云ハ阿多と何に師云延佳
グ尺當作咫と云依ぞ宜きまを決く寫誤れるものあり。
まづ尺とあるを強て助て云は。ハ寸を咫と云ハ寸寸
を尺と云を常おれども周の尺を八寸と云こそ何に又

常ハ咫尺とも連補言相遠クらぬ字あまを此記ハ佐
加ハも阿多ハも尺字を通用して此ハ阿多と注せるも
佐加と混る。故ありとも云はれど猶とく思ふ。然
ハハ非や何の古書ハ阿多ハ咫字をのみ書て尺と
書る例なく。此記ハも即神武天皇段ハ注ハ尺を何
咫鳥と書まむ。此ハ必咫字あるべき物ぞ。注ハ尺を何
るも本ハ咫一字あにハむを本文の誤れ依のら。後人の
狡意^{サカレラ}ヲ改おる。まも本文と共に誤るも有べし。ハ
阿多ハ八字を上をハ尺と依るから。是も狡意ハ加おる
後人の所爲^{レワガ}あり。決て削べし。凡て訓注ハ字訓を用とる
べき謂かりれむ。あま上下共ハ非 かくまむ此注ハ訓咫
あること相照しても知るべし。云阿多を作るはきれに。然て古來夜多能鏡と訓免れど
も。かくる稱の古ハ例。凡て之を添補む。夜多加賀美と訓

ばし。例をも思べし。注し阿多とあるを阿を省くを如何
と云ふ。高天原は天をも云ふ阿麻と注せまざるもあほ麻と
訓むと同格なり。一、離ちて言ときハ天を阿麻咫を阿多
ハ咫を連言と死を高もハも阿の韻あり然れど高天
る故も自ら多加麻夜多と言をるあり。云まざる。
實然依説おれハ尺を咫字小改免記し於。但し師の八咫
の義不釋まじ説え己都了諱ふ抑此八咫の義を古今不
こと能をば其由ハ末よ云べし。抑此八咫の義を古今不
種々の説多り依中ふ古く兩手を相加する廣と云ふぞ
正説ある其を釋紀よ延喜公望私記云于時戸部藤卿進
曰嘗聞或説凡讀咫爲阿多者手之義也。一手之廣四寸兩
手相加正是八寸也。今云八咫者是八く六十四寸也。蓋其

鏡圓數六尺四寸歟其徑二尺一寸三分餘也。是則今在伊
勢大神也。按ふ。此文八寸也と云まては戸部藤卿の嘗
聞知とる古説よて今云と云るをゆ以下を此
主に按と聞えあり然て是を正下文を釈紀の撰者此説
と聞也文を去ばて要を摘て出せれば其意を得て見る
べし。而天徳内裡燒亡之時御記曰天徳四年九月二十四日。
鑿求温明殿所納之神靈鏡並大刀契等申時重光朝臣來
申云瓦上在鏡一面其鏡徑八寸許頭雖有小瑕專無損圓
規並蒂等甚分明見之者無不驚感云々先師申云天徳回
祿之時件神鏡内待所在灰燼之中不燒損其鏡徑八寸許
頭雖有小瑕專無損之由御記文炳焉然則彼八咫鏡徑八
寸歟重窺太神宮式編代一具高二尺一寸深一尺四寸内

徑一尺六寸三分。外徑二尺云々。若就講書之說者。圓數六尺四寸。其徑二尺一寸三分餘。難奉納彼御樋代内八咫之義。已以相違。旁非無疑也。六寸上ある。今云八咫者。是八寸。軟其徑二尺一寸三分餘也。と云藤卿の說を破れる。よて実。然る言あり。記傳ふも咫を八寸として。八咫を六尺四寸。おま圍の度。みして。徑二尺一寸余あり。と云は。秋。論ひ。さる如く。伊勢。神宮の御樋代。此度。不可。せ。び。せ。云。今按咫字者。說文中。婦人手長八寸。謂之咫。周尺也。夫天照大神者。陰神也。件御鏡。已奉圖大神之御像。然者摸婦人手長。奉鑄之於八寸。歟。寸法相合。御記文之上。非無所表乎。加八字者。神道之所尊。爲八卦數之故。歟。と云。師唯。八寸と見れ。た。ハ。て。ふ。言。由。あ。し。神道八を尊ぶ。あ。と。云。免れ。せ。も。由。あ。た。言。を。漫。ふ。加。ほ。き。不。非。交。古。凡。て。然。る。

事あし。ま。と。女。人。の。御。手。此。長。さ。あ。と。云。た。漢。字。の。注。り。依。れ。る。例。の。非。說。あ。り。ま。と。八。を。七。八。の。八。み。非。交。例。此。弥。の。意。よ。し。て。約。免。て。二。八。一。尺。六。寸。不。し。て。也。周。を。以。て。此。說。名。く。ほ。き。み。非。ざ。れ。た。お。ほ。彼。御。樋。代。の。度。不。符。を。交。此。說。の中。八。く。六。尺。四。寸。の。說。と。お。此。今。按。の。說。こ。そ。惡。う。る。免。ま。其。餘。已。を。皆。當。れ。る。說。あ。り。然。る。を。ま。お。是。天。德。四。年。此。災。子。罹。ゆ。給。へ。る。威。所。三。所。は。石。戸。幽。居。此。時。不。鑄。れ。る。本。物。不。非。交。崇。神。天。皇。の。御。世。了。彼。三。面。不。擬。造。ら。ま。と。依。物。あ。り。御。記。の。文。八。寸。許。と。あ。る。を。即。謂。也。八。咫。鏡。と。外。記。の。文。八。寸。許。と。あ。る。を。私。記。も。伊。勢。大。神。と。云。り。ま。鏡。の。一。面。あ。り。今。一。所。の。漏。訖。破。損。と。あ。る。を。其。二。面。中。の。一。面。あ。り。と。漏。損。と。ま。へ。る。故。み。其。度。は。知。ら。れ。ど。り。あ。り。斯。て。此。二。面。を。日。前。國。懸。の。二。大。神。の。然。ま。た。頭。雖。有。小。瑕。御。あ。る。故。み。紀。伊。國。御。神。と。云。へ。り。

とある小瑕を焼損する瑕キマを非ヒは是まこ釋紀リ。大仰云御記文神鏡小瑕如何先師申云此記一書文日神方開磐戸而出焉是時以鏡入其石窟者觸戸小瑕其瑕於今猶存云く就之思之ヘ今内侍所神鏡者崇神天皇御時更所鑄也然則本鏡有瑕所鑄之新鏡不違本樣鑄付其瑕之條明白者歟と云依レ如シ。ま同釈ミ又問天德御記文鏡頭何答此紀第五卷領中頭訓ヒレノ以之按之鏡頭可讀カバ三ノハ夕也先師申云御記文頭之瑕者端之義歟且以頭字讀波多者當紀之說也とあり此紀はて如此ソとも當紀とも云ミむ即日本紀を指せば。此小瑕をレはへり本樣を違へテ鑄付し給テまじきまと決ク其徑ハ八其三面比大小カ度ホドを違テ給マまじきまと決ク其徑ハ八

寸許とある小據りて想像奉れむ其本鏡を八咫鏡と云依八咫を八寸許あること著し然レ咫の本語を阿多アタあるが其はやがて手の義あり故其横徑を用ひて物の長を度るを阿多と云ひ其數比彌加イヤクハま依を八咫と云ふ一手の廣さ四寸あれむ兩手テりては八寸れレ其度ホド依御鏡ありし故リ八咫鏡と謂ふと云ふ義あり此を公望私記ふ嘗聞ツと言依説ヲあまむ延喜以前の古説あること疑あり。大今世人此手の度を驗むるハ我等中人の七寸内外あり物あるが卓ウと曲尺六寸五分余り或は巨餘ハの希クなり然るを屋代弘賢ノめし近キ世ニ聞えし手は長一尺横四寸あり相摸の最手テとも丸山と云ひし

グ手の長八寸横五寸あり。狀迦グ嶽と云るグ手を長八寸三分横四寸二分あり。嶽グ嶽云しグ手を長九寸横四寸四分あり。谷風と云るグ手を長七寸四分横四寸三分あり。雷電と云しグ手を長七寸四分横四寸二分あり。ま近頃肥後の熊本より出て各高かりし大空と云るグ手を長九寸横四寸五分ぞ有る。清正ゆしグ手を長九寸あり。然るま古くハ片手の横徑を四寸としも云るハ其大凡の定免みおもはちて此咫字を上の釋紀もも引ぬる如く。説文あり。中婦人手長八寸。謂之咫。周尺也。从尺只聲と有。解字。手腕の界ある横文とゆ。中指の末まで字。度れる度をて。手腕の界ある横文とゆ。中指の末まで字。度れる度を謂ふ字也。唐土もて古くハ人躰も法を取て度量之躰。為法と何れを始免諸書を引て既第五段八尋殿の所も云るを合せ考ふべし。○按ふハ説文。中婦人とある。婦を決免て衍あり。此然れ。兩手ハ横徑八寸許のを別考へるとるものあり。然れ。兩手ハ横徑八寸許の

稱ふを當まども。片手の横徑四寸を謂ふ。阿多てふ言いは當らぬ字あり。然れハ舊く此字を用ひ來りしを。四寸謂某と云ふ。漢字おきぐ故ふ。此御鏡の彌阿多ある。中人手八寸。謂之咫と有る。偶も相似とれ。強て當ぬる字も。然れ有ま。如此舊く用ひ倣て。漢字の本義を何はま。皇國ふて。阿多四寸の字と定免とれ。其意も用む。難れ。古事記日本紀を勒せりし人も。許ある御鏡を八咫鏡と書き頭の然る。阿多四寸の二並を八咫鳥と書れ。儲り考へ定免て後。思ふ。前子彫る成文。神代紀。猿田彦神の有状を記して。其鼻長七咫云くとある。文を取るとハ過失あり。其由。第百三十六段の。然らば古言。手を阿多と云。依證傳。論ふを俟べし。

云ひ。まゝ十月三日、條ふも。此御鏡の事多記して。賢所三
所。一所鏡件、鏡雖在、猛火上而不漏損。即云伊勢大神云々。
一所圓形無破損、長六寸許。一所鏡已漏亂破損。紀伊國御
神云々。神宮雜例集小寛平焼亡始焼給雖陰山矩不闕と
ある此天徳の度此を誤り傳ふるあり
まゝと釋紀小引る。天徳御記ふ。此度の焼亡後の事を記さ
せ給ひて。瓦上在鏡一面、其徑八寸許。頭雖在小瑕、專無損
圓矩并蒂等、甚分明見者無不驚感云々。春記ふも天徳焼
亡時雖在灰中
不燒損給外記云日威所三所一所鏡而不漏損即云伊勢
とあり
大神一所。山形無破損。一所鏡。已漏亂破損。紀伊國御神云
云々。一所長六寸許也。一所鏡。云々。此御記の文、紀紀の印
本まゝと日本紀畧おぼも、校て正しつと見え。小右記ふも、

村上御記を引て。此度の焼亡事を記され。瓦上在鏡一面。
其鏡徑八寸許。頭雖有一破、專無損。圓規并蒂等、甚以分明
露出。俯縁破瓦上見之者無不驚感。○俯字著聞集小依て
あれを補へり。さて以上を御記の文あり。以下ハ地の文
あり。此村上御記の文上より引る。紀紀の文と少々異あり。
云々。故殿御日記云。恐所雖在火灰燼之中、曾不燒損云々。
鏡三面伊勢大神紀。少見えと也。小右記云小野宮右大臣
伊國日前因懸云々藤原実資公の記あり公
右寛徳二年正月十八日九十二よて薨給ふを推の
せて數ふれむ天徳四年ハ七ふあり給ふ時ふりぬ遠
うらぬ世まゝと寛弘二年十一月十五日。子内裡焼亡の事
の事あり
を録され。ある下ふ火起温明殿神鏡。恐所大刀并契等、不
能取出。燒亡鏡僅有蒂。自餘燒損無圓規。失鏡形。百鍊抄裏
書了此時
の事を内侍所、鏡燒損半とあり。まゝと春記ふと見え。日
一條院御時、圓規損とあり。此を死の事あり。

本紀畧ふも此焼込の事を十一月十五日子宮中火殿上
皆焼込云々神鏡同焼損即大御神の御あり十六日云々
炭中神鏡二面奉求出之此二面とハ謂ゆる紀伊國日前
年七月三日の下召公卿於御前定申諸道勘申神鏡事
不可請改之由群議了今日御前籬中小蛇出来とあり因
よ記しとある小據て畏みく謹て恐所の神鏡の御形
を想像奉ゆる今も尋常ふ有ぐ如き圓規して柄帯とあり
即柄あるはし俗よ手と云ものありある御鏡あるはし其在彼村上御記
了頭雖有一破釈紀ふを
小瑕と有專無損圓規并蒂等甚以分明也
と見え小右記寛弘二年
の外の文小鏡僅有蒂自餘焼損無圓規失
鏡形とあるを考合せて志う想像奉らゆくお正さて蒂

と何依處を即柄あるはし字書ふ蒂瓜當也當底也華當
也おど見えて草木此實の布ぞと云物お依ぐ此を俗言
ふと云實を摘取てを蒂ホツおがらや々著ツキとる枝をもうけて
云絶まどおを俗言ふを
ガクと云ふ即鏡の柄の義小假借カうあずて
蒂字を書せ給ず依あるはし小右記もも蒂と書れしハ
御記の文字小假借をましあ
むらまゝ御記も頭とあ依處を彼神鏡の柄を下として其
上方字詔する文あるはし今も鏡作ふどの詞み頭とも
上とも云れりまゝ柄を古く
を下とも云うと思はまて儀類典み引まゝる大成録
の衆人装束のうぢ鉢の製まを因しとる下み柄長七
尺三寸許黒漆之徑一寸三分許下有石突長二寸許如鏡
下とありて其石突の処如鏡柄と云かくて天徳の度ホドを素モトをゆめ圓規形并蒂も
むが如らむ

伊勢大御神の御とナキす。少く坐カはと。本文ナ。少不合意。
 と何ナ依ナ合ナせて思ナひ辨ナべし。但し御記文ナ一所ナのみ
 通ナまる御文ナあり其ナ一所ナ鏡ナの下ナのみ紀伊ナ圀ナ御神ナ云
 云と何ナ御文ナの二ナ所ナの神鏡ナよナとナる御文ナあるを思ナひ
 合ナせて辨ナべし。はて恐ナ所ナ此ナ神鏡ナのナかく三ナ所ナ坐ナまはを以ナて此
 時鑄ナ給ナへる御鏡ナのナ去ナはて三ナ面ナありしナ去ナをナも曉ナして
 と。故ナこの史ナ初ナ度ナ所ナ造ナ之ナ二ナ面ナ者ナ少ナ而ナ云ナくやナをナ成
 せり。次ナ度ナ所ナ造ナ之ナ八ナ咫ナ鏡ナとナも三ナ面ナあり二ナ十二ナ社ナ注ナ式
 小ナ大ナ御神ナ此ナ御同ナ躰ナの神ナを記ナせるナ處ナよナ廣ナ田ナ日ナ前ナ神ナ社ナ圀
 懸ナ神ナ社ナをナ舉ナりナ去ナまナもナてナも初ナ度ナ小ナ鑄ナとナる鏡ナの二ナ面ナ小
 て日ナ前ナ圀ナ懸ナの御形ナ此ナその二ナ面ナはて神宮記ナ 雜例集ナ引
 の御鏡ナ小ナ坐ナはナこと知ナられとナす。はて神宮記ナ 雜例集ナ引
 上ナり記ナせる。寛弘二年十一月十五日の内裡燒ナ亡ナ後
 の事を録ナして。天徳四年以來。度々内裡燒ナ亡ナ之間。不被ナ燒ナ

給ナ内侍所神鏡。今度燒ナ亡ナ被ナ燒ナ損ナ給ナ依ナ茲ナ件ナ神鏡ナ可ナ被ナ奉ナ鑄ナ
 替ナ之ナ由ナ被ナ行ナ陳ナ定ナ且ナ被ナ卜ナ筮ナ吉凶ナ神祇官陰陽寮并諸道博
 士等公卿僉議之間各勸奏云件神鏡者是非人間之所爲
 天地開闢之初於高天原ニ鏡作遠祖天香山命乃八百万
 皇神達共爾以銅鑄造之神鏡也。以上ノ文ノ神宮諸雜事小
 るも有ナを今ナこれナをナ校ナ正ナして引ナ於ナ○さて此文ナ内侍
 所の神鏡ナを直ナ小ナ高天原ニて造ナれる物ノごとナ云ナるナ崇
 神天皇御世ニ造ナれナ後ニ事を本ニ免ナぐラして内侍所ノ
 神鏡ナをナとナふナとナみナとナる言ナふナして事ニ實ニを誤ナれナはナ非ナ空
 公卿諸道の博士等ノ勸ナ了ナて此ニ等ノ重ニ事ニを誤ナるナべきナう
 をナとナく思ナへし但ナし此ニ間ニ件ニ神鏡ニ元ニ三ニ面ニ也ナ廣ニ皆ニ方ニ尺ニ而
 一面坐伊勢圀ニ一面坐紀伊圀ニ一面坐内侍所ニ是件鏡也ナ具
 見ナ于ナ日本紀ニと云ナる文ノ有ナるナ後ニのナもナ此ニ知ナらナぬナ人ノ書ニ加
 する文ノあるナを炳ナ焉ナし其ノハナ上ニもナ信ナ友ニが引ナ依ナ古書ニも
 小ナ此ニ三ニ所ニの神鏡ノ御形ノ大小ニ具ナ小ニ見ナえトるナをナ此ニ時

故其伊斯許理度賣命亦名天

巴降巴給子る儘ふ變巴給ふこと無く常しへふ天壤と
 共小窮巴無く渡らせ給子るを最も尊くいと有難き
 御事よおそ穴かしあ。○延曆の内宮儀式延喜の大神宮
 正躰を納奉る御桶代深一尺四寸内徑一尺六寸三分と
 ありさて御桶代内の御形容を既み由縁あ巴て秘小聞
 傳とるやう御桶代此中黄金の函の今を二ありて御
 正躰を往古より袋に納安置奉れるを遷宮の度おとる
 新しき袋を調りて旧の袋のまよて納奉る例ありさ
 れど何より重の高くあり給へむ近ごろハ己前の一
 と取替奉る
 事やおまじ
 とぞ何れ
 のとあ

○古史傳九

○五十五

の公卿博士とちの知まざることの有べきやを然るを
 方皆尺而云と云るりて後人の加とる文あゆこと論
 あり殊に具見于日本紀と云ゆあどを餘ゆる安事あり
 まよ件神鏡元三面也やハ今ハ一面ありと云る文よて
 事実も三所恐所坐ませる趣いと著明きも此を以之
 謂之件神鏡改而被奉鑄替之事未分明也縱件御鏡雖被
 燒損給尤可被奉鎮安置於本所也者仍元神鏡御坐也と
 ありまよ同年十二月十四日公卿勅使參宮參議左大辨
 從三位藤原朝臣行成大中臣忌部十部等也是内裡
 燒之時神鏡被燒損給事所被此了て御擬造の神鏡也
 謝申也とあり因よ記し出給
 寛弘の度ふ燒損を給子る後之事を知られと巴まよ是
 たり後
 の事ハ崇神天皇卷六阿那うしあはて右小引替て伊須
 年此処よ委く注べし
 受能宮小鎮座坐比大御神の本於大御鏡の天津御囿と

香山命者。天照圀照彥火明命。

赤名天。出兒鏡作造水主直六。

糠戸神。人部連五百木部連伊福部連。

檜前舍人連竹田連竹田川邊。

連笛吹連等出祖也。

伊斯許理度賣命名義師說。伊斯許理也。初度了鑄多る鏡を意小合を父とて鑄改換るを思ふ。鑄重の義あらむ。凡て事の重あるを志伎留と云重播重浪亦重を斯許理と云る例を。万葉十二ふ。志意や更く思許理來免や也。重將來と詠正と何れ鑄作と正といふ說に依とれらむ。此說小從ふばし。まとい己が打鍛と正を云說に依や。瓦書紀に石凝と作れある字の意不。質石の上よて。鍛ひ凝とる義あらむ。許良斯也。許理と約まる。今世鍛を許呂須と云も疑みて同言あるべし。疑を許呂とも云る例を。姓氏錄に建許呂命此許呂を疑と作也。於能基呂島の基呂を私記に疑と何るを疑と作也。於能基呂呂須と云も生活きとる物を打ひしぎて。活らば疑を許

正云のあらむ。○此の就て又按ふ。狸言ふ。志こり。志こ
る。あといふ言も。石疑の伊を省ける言ある。ほし。其を男
女の中らひ。甚く思ひ相。とるを。もいひ。また。物の一所
ふ。寄りて。堅は。正。とる。あ。と。を。も。云。む。あり。然。れ。む。万。葉。み。
思。許。理。と。詠。る。も。今。世。み。男。女。の。甚。く。思。ひ。度。賣。此。義。を。師。
入。と。る。を。云。と。同。じ。の。ら。む。も。知。べ。の。ら。び。度。賣。此。義。を。師。
み。老。女。多。云。稱。を。見。え。て。書。紀。み。姥。と。書。り。此。字。書。る。老。
母。也。と。有。り。例。を。古。事。記。み。春。日。建。國。戸。目。沙。本。大。間。見。戸。
賣。志。理。都。紀。斗。賣。あ。ど。何。り。ま。と。戸。辺。と。も。通。ハ。し。云。こ。と。
書。紀。り。石。疑。戸。辺。と。も。有。り。ま。と。戸。辺。と。も。通。ハ。し。云。こ。と。
ま。と。れ。ど。此。神。を。決。め。て。女。神。と。非。ざ。り。凡。て。斗。米。
ま。多。斗。辨。あ。ど。名。み。負。る。を。む。み。女。神。の。如。く。師。を。云。ま。
於。ま。ど。然。も。非。空。旧。た。女。男。と。も。み。云。る。稱。あり。其。由。を。
神。武。天。皇。卷。名。草。戸。畔。と。云。各。の。処。り。委。く。云。べ。し。古。事。記。
よ。女。の。假。字。み。用。ふ。賣。字。を。書。き。書。紀。み。姥。字。を。書。る。み。泥。
べ。き。み。非。空。此。を。斗。米。と。い。ひ。斗。辨。と。云。字。女。の。み。稱。を。
と。あ。ま。る。後。世。意。の。利。所。見。ふ。て。御。鏡。の。光。の。利。く。所。見。
所。為。と。よ。そ。お。ぢ。め。れ。利。所。見。ふ。て。御。鏡。の。光。の。利。く。所。見。
と。る。由。あ。ら。む。然。も。あ。ら。む。度。を。清。て。稱。ふ。ほ。し。さ。て。美。
延。を。米。

と約まる。目を米と云も所見あり。ま。と。此。子。就。て。思。ふ。不。
鏡。乃。と。刀。あ。ど。を。磨。か。せ。を。登。岐。登。具。と。云。も。本。を。登。伎。登。
欠。と。清。音。み。云。ひ。て。利。の。由。の。活。き。語。ある。べ。し。今。世。み。
を。利。せ。い。へ。バ。刀。あ。ど。の。由。を。の。み。云。ふ。言。と。
あ。ま。く。ど。語。の。本。を。光。る。由。と。き。こ。ゆ。さ。て。刀。あ。ど。も。と。く。
研。て。光。る。を。能。く。切。ゆ。故。み。自。お。切。ゆ。事。み。專。い。ふ。言。を。
あり。よ。ら。む。又。速。こ。と。字。ト。ン。と。云。も。同。言。の。活。る。あり。
又。金。物。を。磨。ぐ。石。を。登。せ。云。も。利。安。る。と。り。出。て。同。言。れ。り。
下。み。引。流。書。等。み。此。神。の。子。孫。み。男。と。あ。て。斗。米。を。ふ。名。を。
負。る。多。う。る。を。所以。の。事。あ。り。命。妙。刀。米。命。あ。ど。此。神。
の。孫。ある。を。思。ま。と。神。武。天。皇。卷。み。大。久。米。命。此。目。の。大。あ。
ひ。合。せ。ほ。し。ま。と。神。武。天。皇。卷。み。大。久。米。命。此。目。の。大。あ。
流。字。佐。祁。流。斗。米。と。云。る。ま。や。何。ゆ。目。あり。利。此。小。據。ま。直。
み。此。神。の。御。目。此。利。き。由。あ。ら。む。未。知。ほ。ら。ま。天。目。一。箇。
命。此。名。義。を。解。る。処。り。注。天。香。山。命。此。を。伊。斯。許。理。度。賣。
る。考。を。思。ひ。合。せ。べ。し。

命此亦名ある由を。上小引る。神宮記の勘奏文。鏡作大
祖を。伊斯許理度賣命と言ひて。天香山命と云。依りて曉
べし。此傳ハ、仮字日本紀の傳あるべし。然るを、別神の如く
きよと上小委く論へるを思ふ。傳とる説の多し。依りて名此替れ依りてあり。そて次く
て知。名義香山小由れるまとを灼ものうら。其を名り負
坐る事ハ、いまと思ひ得ざるを。試小言を。彼山を。火神
の御體此化まる山をまを。殊小火氣此炫めべき謂ある
を思ふ。彼御鏡の太じく光正坐るを。正負依り名れらむ
り。前小を御鏡を造れる鏡を。香山より取まる謂小因れ
る名あらむと思ひしりど。香山よ正取れるを。鏡小限
ら。祓むれを然○天照罔照日子火明命。此神の天香山命
小いあらむ。

の御父小坐まとは。上小出於。第三十七段。合せ考べし。名義まをも鏡
小由ある御名あり。其をまづ。天照大御神石屋戸を刺て
隱坐しうば。天上も罔土も。常闇と爲れるまと。上小見と
依り如くあるま。此命此御子。天香山命の作れる鏡を。大
御神此大御光小似せ奉り。その己命と等き神の坐まは
と奇み所思看さし。免て。招奉らむ料小。造れる御鏡あり
ま。うむ。太じく光ゆけむまと知はし。ま。其時の字受賣
命の言。勝波命而貴神坐はと奏し。大御神の其を御覽し。斯て大御神石屋
戸を出御ま。高天原も葦原中罔も。復照明くま。る
小依りて。其鏡を天照罔照と稱。とる號あるべし。さて其を

造れる神の功字。其父の名ミナ係カケて。かく負せたるありむ。
まミと若くは。彼御鏡を直ナし此神の造ツクり給ひらむ。亦ナ知べ
らラぬ。其を書紀シに。鏡作ミタマ遠祖トホ天アメ拔ヒキ戸ド兒コ石イシ凝カ戸ド辺ヘ所トコロ作ツク八
咫ヤシ鏡ミタマとも。鏡作ミタマ部ベ遠祖トホ糠カ戸ド者モノ造ツク鏡ミタマとも。有アて御父ミコおほ言
子ミコの間マまマびビひヒ於オるル事コトも有アげゲしシ聞クゆユまマババあアりリ。
はハぐグ。釋紀シヤクキに引ヒキるル大倭本紀オホヤマトキの注ツケに伊勢大御神イセオホミコの御靈ミタマ實シロ
此御鏡ミタマを天懸神アマカサミと稱ナヅケし。木キ固カタ大神オホミコの御ミを固懸神カタカサミと稱ナヅケす。
之コノ。此全文コノを。第百三十四段ヒャクサンジユウダンに引ヒキて。其処コノに委マカく云イハべし。
見ミとミるル哉ナニ思オモふフ小懸コカサミハ借
字ジ小コて。炫カキとト同ナ言ハふフ也ナリ。此コノも天アメを炫カキりリ。固カタを炫カキりリ。由
ちユ依ヨふフと炳ヒ焉ナリ。かカくクまマババ。天照アマテラス固照カタテラスとト。彼御鏡ミタマの稱號ナヅケ
ぬヌるルこコも。彌著ヨシキ明アカあアりリ。炫カキをミ加カ賀カとも。加具カミとも云イハて。常トコ小
天アメ迦カ久ク弓ユミ天アメ迦カ久ク矢ヤ天アメ迦カ久ク神カミあアどドのノ迦カ久クも同ナ言ハふフて。清
音ネの久クをミ書カれレど。まマと濁音ニグンの具ツグをも書カゆユ。然シカまマをミ加カくと。

清スガても云イハふフこと知チべし。故懸コトの字ジを借カまるル也ナリ。依ヨちて火
べベしシ。うウくクて加カく須ス此須スを照テ此須スと同ナ辞ジなり。師シの言
明アカ也ナリ。本阿ホア加理カと訓ツケはし。能ノを誦ス付ツるルをミ已マるルと。師シの言
ぬヌ。此コノも鏡ミタマの光ヒれるルを火ヒの如トシく灼ヒく明アカき意イ取トルて。稱ナヅケ美ミ
と依ヨあるルはし。師シを穗ホ赤アカ熟シク此義コノを釈シヤクす。於オれど此神コノの名
信シぐとトし。但シカし。ホホもモヒヒもモ打ヒ見ミをミとトるルやうの意イあり。穗ホ帆フ
最モトまマとトホホよヨいイおオどド云イハホホの義コノを思オモふフべし。然シカまマハ火ヒを
穗ホと云イハまマし。説シヤクに御鏡ミタマ此光ヒ此灼ヒりリ也ナリ。意イさて香山ヤマノ命ノ
よヨを叶カナふフれど赤アカ熟シクの義コノを更マよヨ由ユふフ。さて香山ヤマノ命ノ
本住ホノませ依ヨ固カタを尾張オウサガ固カタふて。尾張オウサガ固カタ造ツクの祖ソノあるル也ナリ。上
第三十段サンジユウダンに注ツケるル如トシくあるル故コトに。彼固カタに。此神コノを由ユ依ヨ社ヤの
いと多オホう依ヨ。其コノ中ナカに。神名式カミナマシキに。中嶋ナカノシマ郡ノ。眞墨田マシクミダ神社ノ。名
大オホ。仁明天皇ニミヤヒノミコ紀キに。承和十四年ジュウシヨウネン十一月イッパツ。奉授ホウジュ尾張オウサガ固カタ眞清田マシキヨ。

神從五位下。文德天皇紀。仁壽元年十一月。詔尾張國眞清田神列於官社。同三年五月。從五位上眞清田神授從四位下。清和天皇紀。貞觀七年七月。授尾張國從四位上眞清田神正四位上。おど見也。當國の神名帳。正一位眞墨田大名神とあり。今松降庄と云。まて尾張大國靈神社あり。此在所を一宮村といふとぞ。社。文德天皇紀。仁壽二年六月。以尾張國大國靈神列於官社と見也。當國此神名帳。正一位尾張大國靈大名社と申し。當國の國府宮あり。其帳考ふ云。此を國人吉見幸和説。眞墨田社を一宮記。大已貴命と爲とるを非あり。尾張氏の上祖。歷世當國ふ住。其遠祖を祭れる社。三十餘座。

あり。中。天照國照彥火明命。中嶋郡眞墨田神社。祭。巴。一宮と稱。天之香山命。同郡尾張神社。祭。と云。吉見氏。當國坐。東照宮の神主あり。今奉とる。頃國の殿人天野信景等。國君の命を受て。尾張國郡志を撰むと。他。自他の祕書を委く考索。終て記せる由云。是信不然るべし。けるを眞墨を。御紀。眞清と作。依。思。此を彼御鏡。眞清鏡とも稱。む謂。依。上。卷。一。書。白銅鏡と書れし。校意。み。扱。足ら。此。下。ス。三ノカ。バ。三。と訓。ハ。眞澄鏡と云。事。を思ふべし。其を造れる神の御父。此社號。を爲。む。か。し。上。辨。照。國。照。と。負。坐。る。名。は。思。ひ。合。ま。べ。し。さ。て。香。山。命。を。尾。張。大。國。靈。神。と。稱。は。ま。と。を。既。く。當。國。ふ。坐。し。て。國。造。ふ。功。德。の。有。け。む。故。あ。る。ば。

し。師説よ何神まれ。因を經營まして功德あるを其因
因み某大因御玉神社と云ふ。申して拜祀るを正故諸
多しと云れる。如し。山田郡も尾張神
社あり。當因の神名帳より。從一位尾張天神とあり。此も香
山命を祀まるこを疑ふ。注を見る。さて火明命の亦
名を天糠戸神とも申は。此御名の義をいる多思ひ得え。
神代紀に。鏡作部遠祖天糠戸ま鏡作遠祖天拔戸兒石
疑戸邊ふどあり。○鏡作造天武天皇紀に。十二年十月鏡
作造賜姓曰連とはす。是をゆゆ。連の加婆泥をままるふ。
然るを古事記に。連とはる。師は言はれる如く誤れま
す。今ハ舊し就て造を奉おさて神代紀古語拾遺ふどふ
ハ鏡作ま鏡作部ふどのみ有て加さて師説了此
婆泥を記されるハいうふ故も也。

氏の事古語拾遺崇神天皇段に更令齋部率石凝姥神裔。
天目一箇神裔二氏更鑄鏡造劍とある。是に其裔とのみ
云て。姓をも其人の名をも舉げ。世に其史も。此氏人は
見える。おと無を思ふ。甚く衰へ。とるお終ゆ。叔姓氏
録も載される。當時をやく。此氏絶多りしふや。最も畏カレ
き。大御神の御靈寶をしも造奉し神の子孫はかく絶け
むおとハ。甚く哀さむさありかし。と言れおまる。信ふ然る
こをあり。故篤胤おの學問に入り頃をゆ。常に此事の心
を挂て。長息はしく思ふ。ゆしを神の定をおま給へる事
を悉く。今現る志はし有て。其御定は如くれらぬを無き

故に常了その可畏を畏む心ふ。於らく思存は事を皇
美麻命は天降坐は時ふ。天照大御神。産靈神の御量とし
て。美麻命の大八嶋国所知看御政了。必無てハ有まじ死
事は限りを漏るゝと無く。遺依く事なく。任し降し給ひ。
此を第百三十三段より。次。彼天降坐は時れ。大御神の御
次云ふを見て知るべし。詔了。豊葦原中。国を吾御子の治はべき地お正。就坐て
所知看せ。寶祚の隆坐むこと。天壤の共無窮あるべし。と
言祝給ひ。まゝ産靈大神を諸部緒は神とちふ。其職お仕
奉正て。天上の儀は如くせと。御言依して。天降坐し終
給へる。其大詔命のはふく。皇美麻命の嗣く。一御世の

如く。大御世知看せむ。そののみ副て降らる。神等の子
孫も。共ハ八十連お續きて。奉仕るべき事あるふ。絶とゆ
げあるをいと心得ぐとく所思て。猶淡く考と正しうむ。
果して伊斯許理度賣命の子孫も。いと多くおむ有は依。
其は姓氏録に。火明命之後といひ。天香山命之後とある
諸氏これあり。最も畏き大御神の御靈実ともおまは依。宝
鏡を造り奉し神の子孫は絶べき謂はらめやも。何あふ
ふと。此證どもを師は靈の天うけり。いうに聞給ふらむ
其をまお。上お引れるる古語拾遺ふ。唯其裔とのみ云て。
姓をも。其人の名をも舉ざるを以て。此氏の衰とる故と
思ハまじうと。拾遺の例として。唯其祖は名を舉て。當時
此人の名を舉ざるま。此氏人お限らば。諸氏こあ然る

例あり。其この引まゝに依文み。天目一箇命の裔をも其
如く。上第三十九段に記せる。故姓名を記さず依を。此氏の
衰とる證とを言。ぐとくあむ。はと世々の史ふも。此氏人
の見ざ依事ハ。後ふ氏此稱の變ある故ある。出雲氏の
氏とあり。まゝ菅原秋篠。師此歎。伊斯許理度賣命。や
どみ變とるをも思ふべし。考へ漏されし故ふぞ有る。
其を下ふ舉と依諸氏の下ふ。云ふを見を辨ふ。○此
と密に思ふ由あり。其をもし信ふ。鏡作氏を。負る家の他
命の。後と云。香山命の。後と云。氏を。六十家むりも有
べし。此家々の存まる。何ほども有べし。まば。其中の氏
人を選みて。鏡作連の。郡主と給む。事おそ。あら。大氏の後
ま。其を連と。其連の。郡主と給む。事おそ。あら。大氏の後

を小氏たり。嗣る例を。崇神天皇の御代。み出雲。因造。出雲
振根を。誅して。其弟。飯入根。命。此予。宇加都。久奴。命。を。出雲
因造。み定。免。給へる。あど。古き。例。あ。けて。和名抄。ふ。大和。因
正。此。鏡。作。氏。み。限。ら。ぬ。事。ぞ。う。し。は。て。和名抄。ふ。大和。因
城。上。郡。ふ。鏡。作。久。利。都。郷。何。正。脱。と。る。う。は。と。本。を。り。美。字
省。きて。も。云。る。う。と。言。れ。し。う。と。信。友。説。み。此。を。美。を。脱。せ
る。ふ。を。非。姿。其。を。文。明。十。一。年。の。古。本。此。東。大。寺。戒。壇。院。神
名。帳。に。鏡。作。大。明。神。を。か。二。ツ。ク。リ。と。仮。名。を。點。と。り。こ
を。力。ツ。ク。リ。あ。る。多。唱。名。の。音。便。み。撥。音。ふ。と。あ。へ。と。る
あり。此。帳。か。く。る。例。多。し。然。れ。む。既。く。り。カ。や。称。多。依
れ。正。是。不。就。て。又。思。ふ。加。賀。因。の。名。義。も。鏡。子。由。ある。地
名。ふ。や。今。彼。因。ふ。鏡。作。多。く。有。て。毎。年。ふ。諸。因。へ。鏡。磨。の。出
る。を。思。べ。し。と。云。る。を。然。る。言。み。て。鏡。の。名。義。を。炫。見。あ。れ
む。加。く。と。云。ぞ。本。語。あ。り。美。都。久。里。と。あり。加。く。都。久。理。加。く
ふ。鏡。作。郷。何。り。て。加。く。美。都。久。里。と。あり。加。く。都。久。理。加。く
美。都。久。理。い。ぢ。ま。ふ。神。名。式。ふ。同。郡。ふ。鏡。作。坐。天。照。御。魂。神
も。云。ふ。べ。き。あり。清。和。天。皇。紀。ふ。貞。觀。元。年。正。月。大。和。因。鏡。作。天。照
社。大。月。次。新。嘗。

御魂神。授從五位上。と見也。今八尾村社の傍に鏡池と云
何りて乾湖とるが其地子に
と帳考。鏡作伊多神社。鏡作麻氣神社。あど何也。師云或説
伊多神
云云。石凝姥命麻氣神社を天糠戸命を祭るを云るを古
社云。事ありと云まよりいりも由何りて聞也。麻
氣神社を今小坂村を云子に在て。さて此天照御魂神やぐ
春日明神と稱と帳考ふ云へ也。
て火明命小坐也。天照と云ひ。鏡作小坐と云るふて炳
焉し。あ不次くふ
云を見と ○水主直。おむ姓氏録に山城国天孫了。
水主直。火明命之後也。と見え。天孫本紀に。天火明命九世
孫。王勝山代根古命。山代水主雀部祖。と有ふ依て載せ也。
水主。和名抄ふ久世郡水主郷去まぬ也。信友云加茂神
記に大治二年
八月五日。賀茂別雷社領山城国水主郷とあり。山城志に
之。廢郷部に收まて今綴喜郡有水主村也。云也。さて今三

ツ。と神名式に。同郡に。水主神社十座。並大月次新嘗就
中水主坐天照御
魂神。水主坐山背大圀。と見え。ある社に。水主直の祖神等
を祀れる社あるは。仁明天皇紀に。承和十一年五月。奉
授山城国水主神。從五位下。清和天皇紀に。貞觀元年正月。
授從五位上。水主神等。並從四位下。同八年十一月。授從四
位下水主神。從四位上。おむ見也。今大水主明神と申て。聖
験いち速く坐まはと帳
考ふ云へり。さて水主と云。由に詳あらぬを少く思ひ。其
得つる説を有ぬ。垂仁天皇卷二十五年の処に注べし。其
を水主神と云。ふて知られとめ。中ふ天照御魂神とある
は。疑なく火明命と通也。まゝ山背大圀魂命と云。山代
根古命あらむ。然るを。水主直の祖とある此命の。山代

根古と名ふ負る也。此圀の圀魂と稱べき布ど此功德の
無らむうハ。負まじ死名あまむれ也。凡て某圀魂と云る
有りし神を云例あゆこと上よ云るが如し。傳て此社よ
まよ水主坐と云るもおろけの事よ非は。傳て此社よ
坐也。天照御魂神也。火明命あるべく所思るふ就て。あ布
思ふふ式よ。同圀葛野郡よ。木嶋坐天照御魂神社。名神大
嘗新 清和天皇紀よ。貞觀元年正月。木嶋坐天照御魂神正
五位下。と見也。今太秦村の東南よ在り。永万記よ。大和圀
城上郡よ。他田坐天照御魂神社。大月次相 嘗新嘗 清和天皇紀よ。
貞觀元年正月。他田天照御魂神從五位下。と見也。今ハ春
稱也。津圀嶋下郡よ。新屋坐天照御魂神社三座。並名神大
とぞ。月次新嘗

就中_ニ天照御魂 神預_レ相嘗祭 清和天皇紀よ。貞觀元年正月。從五位下勲
八等。新屋天照御魂神。從四位下。と見也。此三座一座ハ西
座ハ福井村よ在り。一座ハ上河原村よ在り。福井村ある
也。今は天王と稱し。上河原あるハ。今ハ天照大神と稱也
と。帳考よ云り。天照と申よ。りて日大神の御事せして
天照大神と思ひ混とるあり。さる例下よも有り。其心し
て辨。此等の御社も。同神れるはし。其ハ津圀新屋也。和名
抄よ。嶋上郡よ。新屋_ル比 郷阿也。又尾張圀海部郡よも。
新屋郡あり。此ハ海東郡よ屬て。新居屋村といふ。當圀神
社帳よ。新屋神社といふ見とるを。圀人よ問へむ。天照大
神と申はと云へ也。天照大神とをいへど。火
明命あることを疑あし。然れむ津圀
ある。天照御魂神也。もや此地を移せる故。尾張の地

名を社號ナし負ネる依ヨべし。尾張に此神の本居坐し因お
べし。まゝと和名抄に伊豆國田方郡に鏡加カれ尤ト上ウ件ケン木
作、郷新居郷あり由ある事あるはし。嶋シマ他タ田タ此コノ二ニ社ニお坐マまシ。天照御魂神と申ウひも、火明命ヒアカミノミコトお
るルはハきキおオとト準スずテ悟サトるベし。此コノをハ何ニもモ其ノ地ノくクおオ。其ノ御ノ齋ノ
此ノ氏ノ人ノの住スるルをハゆユ祭ノりノ來キおオるルおオぞ有アるルきキ。此例いと多
み。大和國津國共し。火明命の御齋を多く載られ和名抄
おも。此氏人子由ある地名を大和にも津國にも多く見
る。○六ム人ヒト部ベ連レンおオをハ姓ノ氏ノ錄ノ。山城國天孫ヤマトノミコトおオ。六ム人ヒト部ベ連レン火明命ヒアカミノミコト五世孫イハヒコノミコト建タケ刀ヤ
命ノミコト之後也。まマとト津ツ國ノ天孫ヤマトノミコトおオ。六ム人ヒト部ベ連レン火明命ヒアカミノミコト五世孫イハヒコノミコト建タケ刀ヤ
米メ命ノミコト之後也。おオど有アるルおオ依ヨて載ノせセ也。まゝと右京天孫に六人
目、命之後也。扱ア河内國天孫ヤマトノミコトおオ。身ミ人ヒト部ベ連レン火明命ヒアカミノミコト之後也と
ともト也ナリ。

見え。天孫本紀に。天戸目命アメノトメノミコト子建斗米命タケトメノミコト次妙斗米命タケトメノミコト。六人部連ムロトベノミコト
等、建手タケテ和邇命ニギハヤヒノミコト。身人部連等祖とトほホまマババ。六人部身人部ムロトベノミコトハ同トおオと
よヨるル。本ホをハ美斗倍ミトベをハ云イはハむムをハ牟斗倍ムトベとも云イはハるルおオ依ヨて。六
人部とも書キけケむムと所思オモへヘ也。身を牟斗倍云ハ其を神鳳抄
ふ。尾張國に三人部御園といふ見ぬれ也。此氏を此地名
をハ負ネるルおオらラむムと所思オモれレババおオゆユ。けケてテ清和天皇紀に貞觀
四年五月の下に。美濃國厚見郡人。六人部重成賜タマ姓ノ善淵タカフミ
朝臣アソノミコトと見え。同八年七月の下に。美濃國各務郡大領各務
吉雄厚見郡大領各務吉宗おオとト也。和名抄に各務郷も
郡と並此コノをハ思オモふム。六人部各務ハ同祖トおオて。尾張國と也。

此圀不移住家ありん^レ。美濃と尾張ハ古と後とハいと
ど考ふるもハ混^レらハしき事多^ク境替りたりと見えて古跡あ
しと其圀人等既^レ云へりき。故神名式ハ各務郡小村
圀眞墨田神社あり^テ。ま^レ同郡小村圀神社と云も式ハ載
慶雲四年の外聖武天皇紀天平十二年此下あども美濃
圀村圀連といふ氏人の見えたるを同流の裔れるべし
然れど郡名此各務ハ鏡の由あると灼^レくはと氏の各
務ハやぐて鏡の借字ありん^レ。然れどあを伊斯許理度
賣^レ天香山一神此御名ふて火明命此御子ある證^ハの殊^ハ
著明^{アキラカ}あるものぞ。さて美濃と尾張とを古くを一圀此お
と聞ゆれど其移住るもいおとゆを云こと外^レく。此處小
も彼處^{カシコ}も其氏人此已^レぐむきく住^レる終^レど美濃の地

ふ住^レるおとの史^ニ見^ユと依^テ。景行天皇紀二十七年の
下^ニ日本武尊此熊襲を取^リ小往坐^{イデマセ}る時^ニ美濃圀此善射^{ヨクユミ}
者^{ヒト}弟彦公と云を召^テて御供^{ミツ}連^ツとるへ協事^アあり^テ。此^ハおと
皇^{ミコ}卷^マ小委^クく此^ハを天孫本紀^ニ考^ヘる^ハ。弟彦公を火明命十
注^ツふべし。四世孫尾治弟彦連とある。即^チ是^レあまを此人の時をゆ。以
前の事とは知ら^レぬ^レ。あ^レハ^レ。かくて姓氏錄^ニ載^レれる右京
美濃とり移り住る^ハ。清和天皇紀^ニ見^ユたる。六人部^ハ
各務の氏人^ハ。其圀^ハ不^レ残^ル。菴^ノの氏人^ハ。あ^ラむ^レ。し。
て和名抄^ニ丹波圀天田郡^ハ六部郷^{アリ}あり^テ。上^ニ田百樹^ニ云^フ。當
當郡^ハ六人部と云見^ユ。此^ハ四輩^ノ順^ニ拜^テ。圀繪^ハ
おも丹州六人部^ハをい^フ見^ユ。と^リと云^フ。此^ハ此^ノ氏^ノ人^ハ
由^レ何^レして號^スる地名^ハある^ハ。と灼^レし。ま^レ同郡^ハ小雀部^ハ郷
直

の処ト引る。天孫本紀の文を考ふべし。此も由ある地絡あり。百樹云。村名帳ニ雀部村とありと云り。さて隣郡何鹿郡ニ賀美郷トあり。其レ神名式ニ同郡ニ天照王命神社トあり。此疑ハク火明命ニあるレはく所思ルふ就テ考ルふ。因造本紀ニ丹波因造ハ尾張因造ト同祖トて建稻種命ノ後ニあり。由見えト也。此因造ノ事ハ成務天皇卷。此命ハ火明命ノ十二年ノ孫ト。天孫本紀ニ見トるニをも思ヒ合ズはし。然れニ。天照王命ニ云ニ。火明命ハ違ヒ有マまニくコそト。此神名ノ玉ハ三々マと訓ベし。其レ上ニ挙ト。さて信友云。伊勢因ノ社ニありニ。皆御魂ト書レたレバハあり。さて信友云。伊勢因朝明郡ニ鷓村ニ齋宮ノ跡ニありト也。其邊ニ六人部ト出ト云とぞ。神名式ニ多氣郡ト。天香山神社ト也。此も由ある

事ハれルはシ。五百木部連ト。こレを姓氏録ニ河内因天孫ハ五百木部連ト。火明命ノ之後也ト見え。今本連字ヲ脱セ也。今天孫本紀ニ。火明命ノ九世孫ト。弟彦命ノ子ト。王勝山代根古命ト。此山城水主ト。直雀部連等ガ祖トあり。其レ上ニ注セるガ如シ。其弟若都保命ト云ニ。五百木部連ト。祖ト有ル。依テ載セ也。此氏人ノ始ニありト見えト。は雄略天皇紀ニ。三年四月ニ下ニ。廬城部連ト。枳莒喻トといふ人ノ子ト。武彦ト云ニ。見え。廬城ト作ル字ヲ異カれドも。云ニ。此人ハ栲幡皇女ノ奸ト也。とレ譖ラまタりシ。其父ノ事トして武彦ハ廬城河ニいフ河ニて鷓トを使ヒ魚ヲ捕テ殺スる事あり。その廬城河ト云ニ。仁徳天皇紀

四十年の下ふ。隼別皇子と。嶋鳥皇女とを。伊勢の蔣代野
ふて。弒せ奉りて。其屍を。廬城河邊に埋納する由見えぬ
れど。伊勢国に在る河あり。然まば此河の名を。氏と爲と
流からむ。と思ふ。然らば。其在安閑天皇紀元年十二月
廿下。廬城部連。枳莒喻。その女。幡媛。が罪を贖ふと爲て。
安藝国。過戸。廬城部。屯倉を獻れる事見えと。然れど。安
藝国の人あり。雄略天皇の三年と。此御世の元年
み。既。了。年。長。と。る。子。を。持。り。し。り。む。此。御
代。ふ。む。百。歳。を。多。く。越。と。る。人。あり。む。和。名。抄。ふ。同。国。佐
伯。郡。伊。福。郷。に。在。り。此。を。本。居。の。地。あり。然。る。を。淳。和
天皇紀。天長十年十月の下ふ。安藝国佐伯郡伊福部五百

足。といふ人見えぬを思ふ。此を枳莒喻が末あるべ
く思ふ。殊に伊福を。廬城の轉語。よて。同氏あり。と。下
ふ委く注に。如くあり。廬城河といふ名を。雄略天皇の
御世に。廬城部。武彦を殺。と。流河あるのら。負る名あり。却
て末あり。べく。所思と。然るに。仁徳天皇紀に。既。く。此。河
の名を。始。ふ。及。不。して。語。傳。へ。と。る。よ。て。○伊福部連。を
例。多。り。る。事。あり。お。不。次。に。注。ふ。を。見。む。
姓氏録。左京。天孫。に。伊福部。宿禰。尾張。連。同祖。火明。命。之。後
也。と。有。ふ。依。て。載。せ。也。ま。と。大。和。国。天孫。も。伊福部。連。と
天孫。も。ハ。唯。も。伊。福。部。と。も。あり。天武天皇紀。十三年十二月の下ふ。伊福
部。連。賜。姓。曰。宿禰。と。見。也。舊。を。上。ふ。見。え。と。る。如。く。廬。城。と
云。に。し。を。此。御。世。の。頃。も。ハ。既。も

伊福と云ハしあり其の上ハ引る雄略天皇紀安閑天皇紀おぞハ連と有て此ハ伊福部連賜姓曰宿禰とあるハ辨ふべし然れハ此御世とハ宿禰の加婆泥とハ云ハしハ然レ也故ハ此ハ小ハ舊ハ子ハとハ但ハし其ハ家ハくハ小ハ悉ハく賜ハへ依ハふハをハ何レらハで漏ハと依ハも有ハしハうハらハ姓氏録ハに連ハなるハも唯伊福部ハあるハも有ハるハ云ハすハかハるハ例ハをハちハて伊福ハをハ和名抄ハふハ備前ハ因御野郡遠江ハ因引佐郡ハおどハ伊福郷ハ何レ也ハ以布久と訓ハを加ハ多ハ云ハすハ此ハに依ハて訓ハべしハ地名和名抄ハに多く見えりハ扱ハ同抄ハふハ播磨ハ因ハ小揖保郡揖保ハ奉ハ伊比郷ハありハ同因同郡云ハすハ揖保坐天照神社ハ名神人ハ神名式ハに載ハされハとハり清和天皇紀貞觀元年正月播磨ハ因ハ從五位下勲八等ハ粒坐天照神

從四位下と見也ハさて御紀ハに揖保ハに粒字ハを書れハとハるハをハ書ハりハ神名式ハ一本ハに粒ハと作ハるハも有ハれハど臨時祭式ハに御紀ハおどハ依ハりハて後人ハのさハうハしハらハあるハべしハ諸本ハに揖保ハとありハ扱ハ此ハ社ハに今揖保郡関村ハと云ハふ有ハてハ今ハ伊勢宮ハをハ稱ハはハ帳考ハよハいハへハりハおハをハ天照神ハと稱ハはハしハ依ハてハ日大御神ハと思ハひハ混ハへハ上ハまるハありハ此社ハに祭ハるハ神ハも疑ハふハ火明命ハあるハべくハたハ不ハ也ハ其ハを清和天皇紀四年ハの下ハに播磨ハ因ハ揖保郡人ハ雅樂ハ笛生ハ無位伊福部ハ貞復ハ本姓ハ五百木部ハ連ハ火明命ハ之後也ハとハ何レまハバありハ又ハ此ハに依ハて按ハふハ伊福ハ五百木ハハハ同言ハの稍ハ轉ハまるハふ借ハれるハ假字ハふハてハ共ハに氣吹ハの義ハあるハを舊ハを伊保伎ハと云ハすハしを伊布久ハとも云ハふハ依ハて伊福ハ字ハを書ハるハをハ此時舊ハの如ハくハ五百木ハを唱ハふハはハきハ由ハを命ハせ給ハへるハ字ハ

復本姓とハ云依あり。吹を吹久と活うし云を常あるをホキとも云るハ御吹玉を御富伎
玉ともあるさて氣吹と云。笛吹小依まゐる氏あらむ。御紀
ふて知べし。樂笛生云くと有かくて伊福と云地名の多うる中ふ。尾
張。因海部郡ある伊福郷。本あるはくおむ也。此も和名抄
神鳳抄ふ伊福部御厨とある也。此地あるり。まゝと
火明命の裔ふ。尾張連海部直の有をも思ふべし。其在尾
張也。火明命香山命の本居此因ふ。景行天皇御
子五百木之入日子命。五百木之入日賣命。共ふ尾張因小
て生坐るをも。思ひ合まべし。此事景行天皇卷ふさて播
磨。因揖保の地名も。五百木部の住るふ因て。號あるあら
む。此氏人ふ縁ありて号くる事い多も更あり其在信友

説ふ。揖保也。拾芥抄ふも揖穂と作れど。古く伊保とも云
牙ゆ。然るハ。新續古今集ふ。い布の湊よて。千鳥の鳴を死
死て。大江嘉言。淡き夜う祢さ絶てきけむ播磨ぐとい布
の湊ふ千鳥鳴あ也。と詠依ふて知るべし。伊保を伊比保
字鏡ふ。疵を伊比保や何るを字。と云るハ新撰
類抄ふハ。伊保ともある例あり。とい牙ゆ。然れむ揖保。伊比
奉。と云地名也。伊富を延て云るを依こや疑ふし。さて五
百木氏也。尾張連をり別也。安藝播磨。左右京。大和。山城。
河内。おども住み。後ふ大かゑ也。伊福部と云也。中ふ。
河内。因のむか也。舊のまゝ。五百木部を唱へるとるから。
姓氏録ふ。まゝ載されゑるあ也。けり。神名式ふ。當因の若

江郡ふ意伎部神社あり。河内志よ所在不詳といへり。此を内山真龍説ふ。意を五百の約れるふて。五百木部神社あらむと云へり。此ハ然も有べし。○檜前舍人連。古を姓氏録。左京天孫部ふ。檜前舍人連。火明命十四世孫。波利那乃連公之後也。少有よとて載せり。天孫本紀よ。火明命十四世孫。古を針名根連とあり。即此人。天武天皇紀ふ。十二年九月。檜隈舍人造賜姓曰連と見えて。本を造の加婆泥おゆき。檜前を和名抄ふ。大和国高市郡ふ。檜前比乃久末とあり。郷是れ也。宣化天皇紀ふ。檜前庵入野宮。言の意を木圍の日前とあり。此地よ在し宮あり。言の意を木圍の日前と同義よて。此も鏡に依る稱の地名ふおまるといふべし。

志。さる例い。ちて波利那連公の名義を思ふよ。決ちく尾張と多り也。此地よ移れるれらむ。尾張ハ其本國あるこ。張とゆ。此地よ移れるれらむ。尾張ハ其本國あるこ。其を天孫本紀す。此を尾治針名根連といひ。神名式ふ。愛智郡ふ。針名神社も有れむあり。式よ備前国御野郡ふ。尾針神社。尾治針名真若比女神社。おどあり。和名抄ふ。同郡よ。伊尾張郷もあり。其他の氏よ由あり。ちて稱徳天皇紀。神護景雲元年九月の處よ。上總国海上郡人檜前舍人直建麻呂賜上總宿禰と見え。和名抄ふ。同国武射郡よ。新居新屋あり。仁明天皇紀。承和七年十二月の處ふ。武藏国加美郡人檜前舍人直由加麻呂等男女十人貫附左京六條と見え。

也。和名抄み同園荏原郡み覺志加之と云る郷あり。燃の義々。まと榛沢郡み新居郷と云もあり。由ある事あり。さて加美郡と云郡名も必鏡をり出おらせ。故力。三と訓於凡て諸園み加美てふ地名多し此を上下と對へる地名おきハ大抵鏡み由あり地名と聞えり。心然れを著て考ふべし各務と書る地名を云も更おす。此氏人ハもと尾張をり移すて大和園高市に在み。檜前を氏と爲きむらまと東園に移り住す。此時召まりぬ。此故。姓氏錄み左京み○竹田連。此を姓氏錄左京天孫部み竹田連火明命五世孫建刀米命之男武田折命。景行天皇御世擬殖賜田夜宿之間箇生其田此田の在し市郡ありぬむこと次天皇聞食而賜姓箇田連と有小依ゆて載せす天孫本紀みも火明命五世孫建斗米命子建多乎利命竹田連等祖とあり竹田を本す。箇

み誤れるを今改めて引す。まと姓氏錄今本み湯母竹田連とありまと湯母を行あり今を古本み無ふをまり。ちて箇を竹の借字おす其を次小引く文小供御箸竹と有る小依て知べし箇の一夜小生出む事ハ何竹田と負依本義をく聞えとす。○竹田川邊連おハ姓氏錄左京小竹田川邊連火明命五世之後也此を上小見とる武田折仁德天皇御世大和園十市郡刑坂川之邊有竹田神社因以爲氏神同居住焉。綠竹大美供御箸因茲賜竹田川邊連と有小依て載せり此を上小舉とる竹田の氏上おて有けむら。其を竹田神社ハ彼田み竹の生とる故み祭とる社命を云名を竹田刑坂川之邊に住す。仁德天皇の御世小居の義ありべし。

御箸を供タケまゐるに依て。川邊てふ言を。復カサ祿て賜へる由あり。神名式に。十市郡竹田神社とあり。即チ是チあるはし。今竹田村
也云とぞさて其祭神を香山命を祭まゐるあらむ。此神は竹
小由ありこと。下第五十二段波波く迦カの処。小注を見と。○笛吹連。古
姓氏録河内国小笛吹連。火明命之後也。と有るをりて載
せ也。神名式大和国添上郡小笛吹神社あり。諸本小穴吹
れり。今ハ度會延住の旧事紀頭注此に笛吹氏より由あり
よ引るに。笛吹神社と有るをり。此に笛吹氏より由あり
社あり。上引る清和天皇紀小雅祭笛生氏小笛吹と負
る由も何も。下第五十二段波波く迦カの処。小注を見るべし。亦此此外
姓氏録小河内国小尾張連。吹田連。身人部連。五百木部連。

若犬養丹比連。火明命の裔ミタ比氏人ら多く住也。さて
丹比郡あり。郷名小も。河内郡古市郡小新居。志紀郡小新
家。此今丹比郡大縣郡。澁川郡。賀美。あど見と。郷名
を悉シく由有ておほゆる。小就て按オモふ。神名式小高安郡
小。天照太神。高座神社。二座とあり。社も。疑なく。火明命。香
山命を記ツまゐる。あらむ。知れと也。其を舊事紀。天照国
照彦火明命と。櫛玉饒速日命とを。一神とし。香山命と。高
倉下クラジとを。一神を爲し。るを。附ツケ會アハセさる。あらむ。師を云クま
ふれ也。熟思ヨクへ也。此を信シみ疑ヒなき事外ト也。此こと。神武
日命の下。委ツ主ツ。此社を。火明命。香山命。亦名高倉下命と。
を待て見むべし。

座を齋とす。小違有まじく。これ猶思ひ合はべき事。八陽
成天皇紀。元慶元年十二月。筑前国正六位上天照
神。從五位下。と見え。神功皇后。具原氏の和爾雅。遠賀郡
高倉村と云ふ。高倉神社と云在。相殿神一座。天照大
神。神功皇后の祭。給へる社の。其云也。此は天照神
と云ふ就て。大御神あらむと思ひて。天照大神と云。免れ
ど。決免る日。大御神を坐さ。び。火明命。命あるべく。おふ也
まむ。彼。大后。比。御世。此所。は。鏡。を作らせ。給。牙。る。事。を
ど。有。て。祀。給。ひ。ら。む。と。思。合。さ。る。れ。バ。也。和名抄。小席田
郡。小新居。夜須
郡。小賀美。あ。と。云。郷。名。の。ま。と。式。小。對。馬。國。下。縣。郡。小。阿。麻
郡。小。由。何。の。事。あ。ら。む。り。

氏留神社。と何依社も。決免て火明命あるはし。故。是。よ。と。り。て。火。明
命。の。御。名。の。天。照。國。照。を。阿。麻。氏。流。と。訓。於。 其。上。小。舉。之。依。粒。坐。天。照。神。筑。前。
國。あ。る。天。照。神。共。了。火。明。命。あ。る。は。く。所。思。る。小。就。て。思。ふ
ふ。此。ハ。假。名。小。書。依。の。み。異。れ。ま。ど。も。唱。の。同。々。ま。だ。あ。り。
この阿麻氏留神社。もしく。と。顯。宗。天。皇。比。御。世。小。日。神
月。神。の。御。託。坐。し。て。産。靈。神。を。祭。ふ。免。給。へ。る。と。き。小。其。事
を。承。賜。ハ。ま。る。人。く。た。對。馬。國。小。由。何。の。事。あ。り。し。ら。バ。
其。時。の。奉。物。の。御。鏡。を。彼。國。小。作。あ。ど。爲。れ。む。謂。ふ。因。て。
祭。れ。る。形。ら。む。も。知。べ。の。ら。び。但。し。去。を。試。み。云。の。み。あ。り。
あ。不。此。と。顯。宗。天。皇。卷。三。年。三。月。の。処。小。注。を。見。る。べ。し。
凡。て。天。照。之。號。小。負。る。神。社。の。信。小。日。大。御。神。小。坐。む。う。ハ。
必。そ。の。大。御。名。を。社。號。小。稱。し。奉。る。は。じ。き。理。あ。依。こ。と。古
實。を。得。ぬ。ら。む。人。也。自。小。辨。ふ。べ。き。物。ぞ。凡。て。名。を。云。を。不
禮。と。依。る。事。ハ。諸

越ふ倣へることのみ思多ハ委のらび古も況て大
事の状も依りて其意むすの既く見とるを也。況て大
御神とどふ申さえて。唯ふ天照神と申さむとを甚
も可畏く。不禮とも不禮き言状ある事を。熟く思ひ辨へ
て。天照大御神あるはじき事を悟、祢うし。但し哥もか
あとも有まど哥を調べを合さむと。○上、件ふ注せる。天
照と號ふ負坐依神くは。式あるも御紀あるも悉く火明
命あるはく所思るふ就て。因ふ此等の餘。天照てふ言
此冠と依神の名此。御紀ま。他書ふも見とるを集終
て。此辨へむと。此輩尋常此人あどハ天照と号を負
る神ふ日大御神あらぬが有こと。或は得知らえて天照
の二字をどふ申せむ。大御神此御事を思ひ。御紀ま。餘

書をも読て。天照と号ふ負る神ふ大御神あらぬも坐こ
と多知まる輩も。何の神も申さべき等称あり。れど心
得とる類も多。其むまお清和天皇紀。貞觀元年五月の處
ふ。山城、圀正六位上。天照御門神。授從五位上。異本よ。從五
を誤あ。其むこの全文よ。山城、圀從五位下。大川原、圀津
神。有市、圀津神。正六位上。天照御門神。並授從五位上。とあ
りて。大川原神と有市、圀津神と。當時從五位下。坐
し。一階を進免て。從五位上を授。給ひ。天照御門神ハ。當
時正六位上。坐し。從五位下を越階して。從五位
上を授給する由あり。並と有み。心字著て見るべし。と
見えある神の天照。神と云まで係れる稱言ふを非。と
御門と云ふ係れぬ。その天照御門と。天照大御神の御
門。と云義と通ゆれぬ。天照御門之神。と記さるはきを。門
神と書べ。此漢文の格ふ。之字を省きて記し。ま。とるあ。と

其を櫛石窓、豐石窓、神を。御門、神と申せども。此を御名
小ハ非で、御門を守る神。といふ義あるをも思合はべし。
故古事記ふ。此神者御門之神也。と記す。かく有むふ。誰
誰も御名とは思ふまじきを。之字亦死故惑ハしき。亦
也。まじき物あり。少く其例を言は。木、神野、神、御食、神、あ
ど申せども。此を名よ。非は。實の御名。久く能智、神、草
野比賣、神、豊宇氣毘賣、神、み。此神とち。木、草野、御食を掌
看。比賣、神、故、木、之神、野、之神、御食、之神、と申、あま、正、し、く
ハ、之、字、を、加、へ、て、記、す、ま、じ、き、を、漢、文、の、格、を、御、門、神、と、書、こ、と
如、く、記、す、に、あ、れ、ど、御、門、之、神、と、書、べ、き、を、御、門、神、と、書、こ、と
も、此、等、小、准、へ、て、悟、る、べ、し、此、餘、も、諸、書、小、見、と、る、神、名、
ま、と、式、に、載、ら、ま、と、る、神、社、の、号、小、女、悉、く、此、心、得、あ、く、て
を、得、有、ま、じ、き、物、を、依、を、某、神、社、と、有、れ、ど、や、う、て、其、を、打
任、せ、と、る、御、名、の、お、と、心、得、と、る、輩、も、
多、う、依、を、甚、漫、あ、る、に、さ、あ、り、し、
ち、て、此、天、照、御、門、神

と云神。御門之神と申せ。疑なく天、石戸別、命からむと
也。誰も思ふべし。此は式。山城、国、葛野、郡。天津石門
別稚姫神社。大月次。とある神ある。ほく所思とす。其を此
御社の事。清和天皇、紀貞觀七年六月の處。山城、国、從五
位上。天津石門別稚姫神、列於官社と見え。此年始。終て、
官社不定。給ひて。神祇官の神社帳。よを載され給へる。亦
也。神祇官の神社帳の事。を徴也。然れば以前。小。いま。と帳
第三條。よ。委く注。るを見。む。小載され給へぬ。と。當時。世常。小。申し習。む。稱の。は
は。よ。天照御門、神と申。て。往昔。よ。正六位上。を授給ひ。此位
奉られし事。を。貞觀元年。小。從五位上。を授奉。也。給ひ。む。
御紀。よ。漏。と。り。

が。同貞觀七年。官社と定免給ふ時。正タシく天津石戸別
稚姫神と載シされぬ。其を官社に列ツラせられ給へる時
も。既ヤく從五位上上に坐ませまど。是を正以前。天津石
門別稚姫神と申て。位階を奉られ。依事ヨシれくて貞觀元
年。天照御門神神從五位上上と有ふ。とく符フるを以て思
ひ辨ハべし。例を言ば。貞觀元年正月。大和。天香山。太麻等
の社を見ざるを。此を十市郡。天香山坐。擲眞命。神社と
見え。その神あり。其をその分注。元名。太麻等。乃知
神と有ふ。て知られ。ゆか。る例。を。有。さ。て。此
香山坐。神。元。各。云。く。と。有。故。御紀。太麻等。野知。神。と
ある。此。社。と。云。こ。を。知。る。を。天。石。門。別。稚。姫。神。も。元
名。天。照。御。門。神。を。記。し。べ。き。を。漏。さ。ま。る。物。と。こ。を。お。も
てる。扱ハその天津石門別稚姫神といふ神を。決免ケツメンて。萬幡

豐秋津比賣命命あるレ。ばく所思オホユる由有て。上上に注注せ給給。第第四
段段を披披き。ままと貞觀三年十月の御紀に。備後。天照眞良
建雄神神。授授從五位下下。一一本本に建建と見見ぬる神を。決決て天目
一箇命命。亦亦名明明立立。天御蔭命命。あるレ。ばく所思オホユとゆゆ。目目一一命御蔭命同神
段段に委委く。其其上上に見見える。石屋戸段段に御鏡を作作まるる
云云ゆき。事事を取取。天金山之鐵鐵。而而求求。鍛鍛人天津麻羅羅。而而科科伊斯許理度
賣命命。令令作作鏡鏡とと有有る。鍊鍊を麻賀祢祢と訓訓べし。此時の御鏡を。
さて麻羅を師の師ウウと訓訓まる。天津麻羅ハ。上上に注注る
るる。即即天日一箇命命にて。此を御鏡を鐵鐵にて作作依依故故に。伊
斯許理度賣命の作作せ給給ひ給。其其を鍛鍛ふる下事下事を。天

津麻羅^セ爲^ルし^ル由^ルあり。斯^レて伊^ス許^リ理^度賣^命 亦名、天香

山の御父^を。此^レ功^を不^レて^テ天照^罔照^と名^を不^レ負^坐る^を思

ふ^よ。天津^{麻羅}命^も。此^レ時^の功^を不^レ依^て天照^て不^レ稱^號を^負

ふ^らむ^と所^を思^ふと^す。 心を平、みして、熟く思ひ辨ふべし。明

立天、御蔭、命と云名も、鏡よ由ある名

見^依ふ^も。此^レも^も社^名の^改れ^る。都^て此^レか^らむ^と所^を思^ふ也^る

社^さ牙^を不^レ見^え交^然ま^を漏^さま^を多^る。 此例も、亦いと多

十一段、忌部、首の、然^を有^れど^も。此^レ罔^を三^上郡^をめ^て其^レ

郡^を三^上多^可お^ど云^郷何^に也^に。此^レを^近江^罔野^洲郡^の三^上

郷^まと^犬上^郡の^田可^郷を^移せ^る地^名あ^るま^と炳^く所^を

思^まむ^{。由}あ^きふ^非也^{。其}を^神名^式に^野洲^郡に^御上^神社

と^云を^載さ^れて^{。此}を^天御^影命^一箇^命 亦名、天、目に^坐せ^む也^に。

此事第三十九 段^を委^く注^り。ま^と陽^成天^皇紀^元慶^七年^十二^月の^處に^也。

伯^耆罔^正六^位上^{。天}照^高日^女神^從五^位下^と見^とる^神も[。]

式^に不^レ見^え給^をば^{。更}に^考ふ^べき^便も^無を^於ら^ず思

ふ^む。此^レを^ハ日^大御^神に^坐ば^く所^を思^ふ也^{。其}を^大御^神

を^示天^照大^日靈^命と^申は^御名^とあ^らず^大と^高と^の違

のみ^をま^む也^に。 大も高も、称言みて、然し

世異なる意をたれり、ま^と神^名式^に。

山^城罔^久世^郡水^度神^社三^座と^見と^る社^の祭^神を^山城

風^土記^に。天^照高^彌牟^須比^命和^多都^彌豐^玉比^賣命^と何

依^レて高彌牟須比命^ミ。天照を冠^スと依^レ非^ズ。天照の下^ニ某命^ミと^リ。某神^ミと^リ有^ル々^ニむ字^ノ。脱^ス多^クること疑^フふ。然^レらざれば。式^ニ三座^ニ有^ルふ合^ハざれ^ド也^ニ。前^ニ命^ミ此^レ字^ニ脱^スと^リ。比賣^ノ神社^ニやいふ見え^ニ餘^リ書^キも^ト和多^ク都^ノ美^ノ豐^ノ王^ト比賣^ノ命^ト。三^ノ柱^ノあらむと思^ヒし^レう^ド。阿波^ノ国^ノ名^ノ方^ノ郡^ノも^ト和多^ク都^ノ美^ノ豐^ノ王^ト云^フること^ニあ^リ見^ユと^モむ^ド。豐^ノ王^ノの上^ニ命^ミ字^ニ脱^スと^リ。ハ非^ズ。上^ノの件^ニ此^レ説^トも^トを^シ。孰^ク考^ヘ已^トして。天照^トと號^スふ^レ依^レ神^ニ此^レ悉^ク去^リ負^ヒ給^フべき由^ヲ有^テ。負^ヒ坐^スある^レ去^リを^シ辨^ヘ。まゑ天照^トと負^ヒる^レ神^ノ名^ヲも^ト。太御神^ニあら^ル始^メが有^ルこと^ヲも^ト知^ル也^ニ。は^ト誰^ト神^ニふ^マれ^ド。甚^ク尊^ミ奉^ヒて^モ。申^ズば^キ稱^メのご^ト思^フむ^モ。非^ズ依^レ事^ヲを^シ悟^ルる^レ也^ニ。凡^テ神^ノの御^上も^ト己^ノ私^ニを^シ挾^ミて^モ其^ノふ^レ仕^テ奉^ヒ

る人^ノあ^リどの^ノ強^クても^モ其^ノ神^ヲを^シ他^ノ神^ニを^シり^も立^テ勝^ルる^レ神^ノ云^フ。あ^リむ^モや^レ構^ヘ其^ノふ^レけ^テも^ト其^ノ神^ノ子^ト對^シへ^ル神^ノを^シい^ヒひ^レ。さ^レむ^トは^レる^レ類^ノも^トあ^リま^ド其^ノも^トや^レと^モあ^リ忠^ニ心^ヲも^ト有^ルれ^ド。い^ハせ^レ畏^キ所^ヲあ^リり^も其^ノ社^ニあ^リ神^ノ主^トと^リ祝^ヒ等^ノあ^リと^リ已^テ私^ノ神^ノ社^トと^リを^シ無^クこ^トも^トて^モ。悉^ク朝^ノ廷^ノの^レ神^ノ社^ニあ^リ。凡^テ已^テ私^ノ神^ノ社^トと^リを^シ無^クこ^トも^トて^モ。悉^ク朝^ノ廷^ノの^レ神^ノ社^ニあ^リ。依^レ字^ニ此^レを^シ譬^ヘて^モ。君^ノの御^上此^レ八^ノ人^ノあ^リ。お^ノの^レ杖^ニ代^リ人^ヲを^シ附^テ。君^ノの御^上此^レ八^ノ人^ノあ^リ。人^ノども^ト此^レ杖^ニ代^リ人^ヲを^シ附^テ。君^ノの御^上此^レ八^ノ人^ノあ^リ。い^ハち^ノ等^ノ卑^ク賢^ニ愚^ニを^シ其^ノ父^ノ君^ノの定^メこ^トも^ト有^ルべ^ク。別^レて^モ崇^メ養^フく^レと^リハ^レ君^ノの仰^ヒを^シり^も。姑^ク持^テ別^レて^モ崇^メ養^フく^レと^リハ^レ君^ノの仰^ヒを^シり^も。あ^リき^レ事^ノあ^リる^レを^シ。或^レ人^ノ問^ヒき^レらく^ニ。皇^ノ字^ニ沙^ニ汰^ニ文^ニふ^レ引^ル。鳥^ノ羽^ノ院^ニ。天^ノ皇^ニ此^レ天^ノ仁^ニ二^ニ年^トと^リ天^ノ永^ニ二^ニ年^トと^リ。兩^度の^レ宣^メ命^ヲも^ト。外^ノ宮^ニ此^レ度^ニ相^シ坐^シ神^ヲを^シ天^ノ照^ニ坐^シ須^ク豐^ク受^テ皇^ノ大^ノ神^トと^リ宣^メする^レ事^ノの

也。此をいふ。答。此大御神。天照坐須。と稱すべき謂を
けま。正しき古書共ふ。更ふ例なき事あるを。謂ゆる五部書
の類其餘も此大神を天御中主神因常立神と同神ある由み偽記せる書等み見とる事今云うぎり非
宣命調上ま依博士とちの心得ひが免とる誤依を
のし去非をもらし給子ふ依べきまと決れし。其
上件ふ舉ある神名どもを見と。唯天照を有れど坐
須てふ言の有るを。彼を悉く負給ふべき謂何て。負
坐依あまど。其功德ふ因て。稱美辭ふ冠とるも此故。坐
てふ言を加ざる字や。挂まくも可畏也御事あら。天照
坐須と申ひ言を。實事ふ係りて。唯此稱美辭の類ふ非

む。伊須受能宮ふ鎮座坐。大御神ふ限て。申奉る言ふ
こそ有れ。他神とち假令いり。尊き御謂。此坐まはとも。
如此申し奉らむ事。實事ふ何とらざる故。却て其神
を誣奉るわざありかし。其を内宮ふ齋祀奉る。天津
日大御神ふ大坐まし。其現御身ハ高天原ふ神留坐て。亦
本其大御靈也。内宮と天宮とふ御往來坐し。此を上も
抄寿永二年六月の下。祭主親俊奏法皇云。夢想云。參神
宮平伏庭上。父親定并親章在堂上。以親定專仰云。於我者
今向天宮給畢。法皇御事所令申付。荒祭宮給也。云くと見
えとるを熟思ひて。其大御靈の天宮ふ御往來ひ坐。こを
を悟るべし。さて親定并親章と。のり下ふ。兩人過去者。と
いへ。依本注あり。然れむ。此を身亡て。後み。大宮ふ参り
仕奉られし。あて。此ふ就て思ふ。神の宮人。とちの。とく
其宮ふ仕奉まる人。くの魂。此行。方。此明。う。み。知。れて。いと

頼もしく、羨うらやまま 今日けふ此こゝ何なに多おほ也。天地の間を御照し坐まは
しき事ことよあむ。事實ことを以て。天照坐須と申あまを。誣しへ奉る言ことばよ非あやまや。豊受
も。他神の御上みかみよ申さむこを。誣奉る言ことばよ非あやまや。豊受
皇大御神ハしも。然しか誣しへ誣しへとる稱美辭たかほこを申て。稱奉らざら
むも。其尊たかさ此こゝ比ひまし坐まさぬ事こと也。然しかむのり尊たかく坐ままは。
天照坐須大御神の御手みて自みづから。大神おほみかみふ奉た給たまふ神衣かみを
織オリ正ただ坐まし。御自みづから。新嘗奉あたら給たまひしおど。都みやこて神かみを祭まつる
事こと也。大御神の豊受あたら大神おほみかみを祭まつ給たまへるを起おこれる由よし也。
上うへ 第四十 上うへ 第三段 上うへ 第三段 上うへ 第三段
み委まかく注つせる如ごとくあまむ。相あ當あたらぎ依よ稱美言たかほこ
を冠かぶへて。尊たかみ奉たるおど也。中なかくふ心こころ憂うれき事ことぞのし。

爾コノニオホセ科アメノマ天ヒ麻ツノ比ミコトニ止マタノ都ミナハ命アマ 亦ツ名ミナハ天アマ津ツ
名ミナハ明アカリ立タツ天アメノ 而テ令シメ作ツクラク雜サクノ刀タチ斧ヲノ及マタ鐵サナ
御ミ陰カゲノ命ミコト 而レ令シメ作ツクラク雜サクノ刀タチ斧ヲノ及マタ鐵サナ
鐸ギラキ矣カレ故コノ是アメノ天マ目ヒト一ツノ箇ミコト命ハ者ツク筑シ紫
伊イ勢セ兩フタク圀クニ忌イミ部ベ倭ヤマト鍛カヌ冶チ等ラ出ガ祖オヤ
也ナリ。

天麻比止都命上。第三十段。九段。ふ御名の出たる處ふ委く云

る如く。天津日子根命此御子ふ坐て。鍛冶カの事を始とる

神カ也。亦名天津麻羅命。亦名明立天御蔭命。名義上。十三

九段。四。ふ出とり。○雜刀カ。此下。ふ見もる。手置帆負命。日

子狹智命此。新宮を作るふ用ふ。雜刀物カ。ふ依べし。○斧ハ。和

天照大御神カ。村雲。劍を献とまふ。処カ。注べし。○斧ハ。和

名抄カ。斧ハ。和名カ乎能。一云與岐カ。乃カ。和名カ乎

を作まるカ。新カ。瑞御殿カ。を造る。料カ。の木を伐る。料カ。○

鐵鐸カ。佐那岐カと訓べし。即本書カ。古語。實カ。鐸カ。字カ。やぐて

佐那岐カ。ふまぞ。此カ。鐵カ。以て。作れ。依事。を知らせ。むとて。鐵

鐸とを書るカ。依べし。けて。此物を作まるカ。天。宇。受。賣。命

の俳優カ。依る。ふ。持べき。予カ。著る。料カ。ふ。儀。式。帳。新。宮。造。奉

時。行。事。并。用。物。事。條。目。山。口。神。祭。用。物。の。中。小。鐵。人。形。四。十

口。鏡。四。十。面。鉾。四。十。柄。木。本。祭。用。物。中。小。鐵。人。形。四。十。口。鐵

鏡。四。十。面。鐵。鉾。四。十。柄。地。鎮。謝。用。物。の。中。小。鐵。人。形。四。十。口。

鏡。四。十。面。鉾。四。十。柄。と。見。え。明。應。六。年。同。宮。假。殿。遷。宮。記。小。

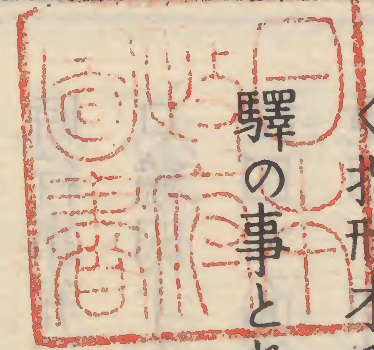
鎮地祭物カ。小。鐵。鏡。肆。拾。枚。同。人。像。肆。拾。枚。鉾。肆。拾。枚。後。鎮。祭

物。小。鐵。人。像。肆。拾。枚。同。鏡。肆。拾。枚。同。鉾。肆。拾。枚。御。船。代。祭。物

了。鐵。人。像。肆。拾。枚。同。鏡。肆。拾。枚。同。鉾。肆。拾。枚。と。の。也。古。ハ。鐵

を主カと爲レとること。是。等。ふても。知べし。字。書。小。鐵。を。鐵。同。じ。と。あり。

○門人。岩崎長世。馬島穀生。北原信允等。いふ。大木の古史
傳の九卷コノミキ小何とる卷を。百志ぬ美濃山。杞きる山也。大峽
小峽よねひ立依。花ぐはし佐久良の木字。忌斧もて打き
て。本末をば山の神ふまぢて。其中此間を持出來て。か
く指形木ふ成し扱る也。中津川の驛長。市岡殷政と。同じ
驛の事とれる。肥田通光と二人ふふむ。



肥田通光と二人ふふむ。中津川の驛長。市岡殷政と。同じ驛の事とれる。大木

